

K250.3

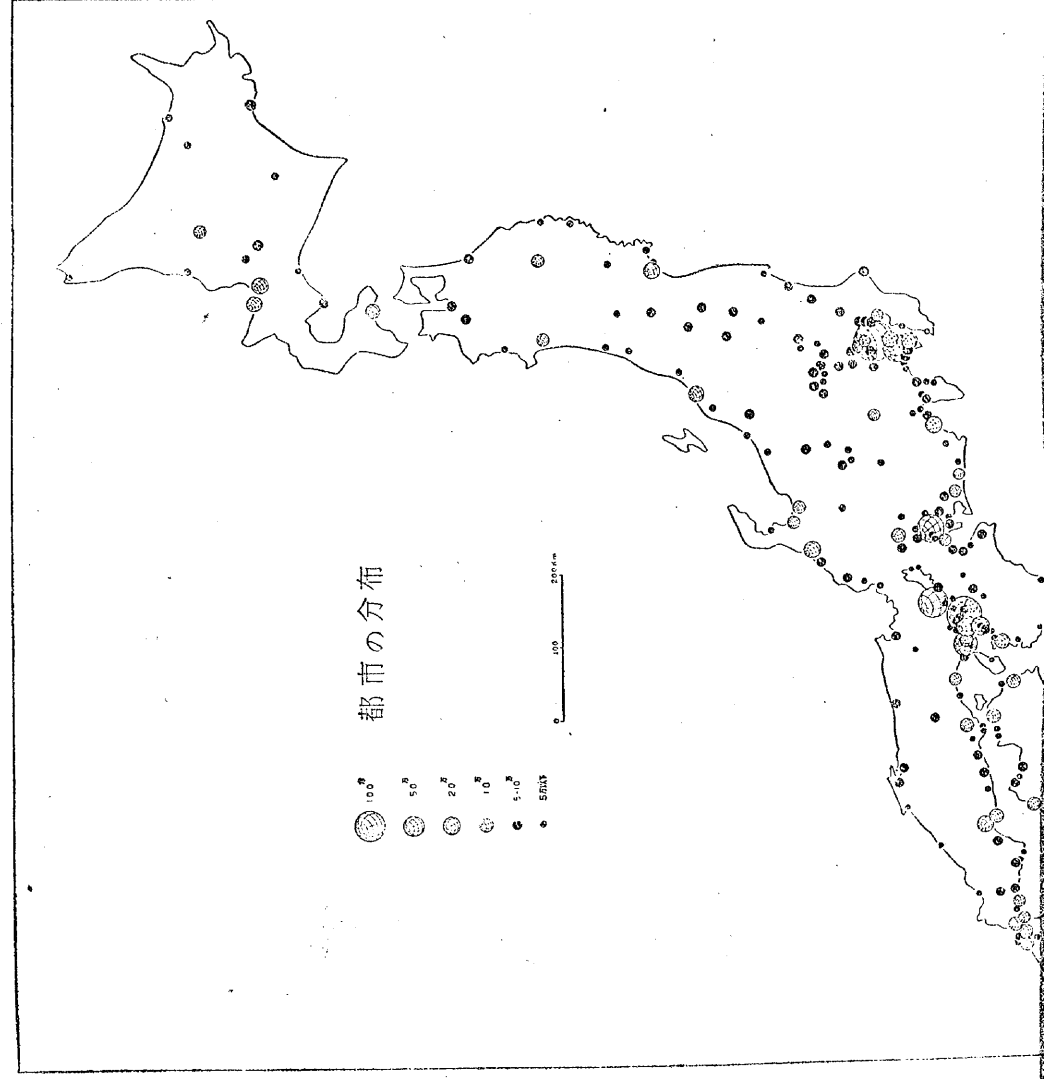
1

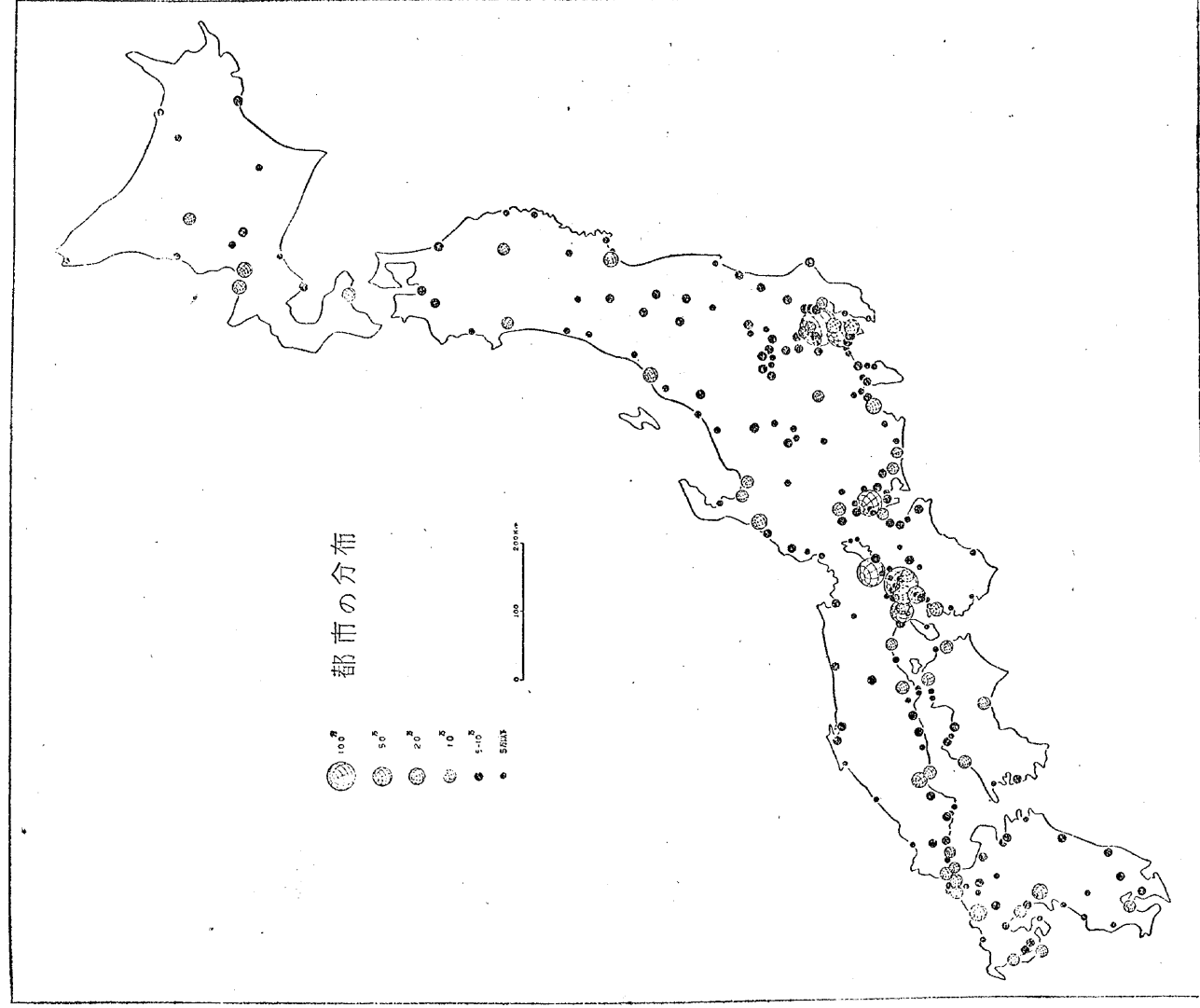
5a

文部省著作教科書
社会科 5



本の都市





注、市制を施行しているもの（昭和24年4月1日現在）。本文の第3ページを参照。



日本の都市

文部省調査資料館蔵

目 次

は し が き	1
第一章 現代の都市	3
(1) 現代都市の役割	3
(2) 都市の人々	10
(3) 都市内部の地域	19
第二章 都市の発達	25
(1) 都市の起りとその移り変わり	25
(2) 近代工業の発達と都市	38
第三章 これからの都市	46
(1) 燃えない都市	46
(2) 健康的な都市	50
(3) 交通を愉快に、安全に	56
(4) 都市を美しく	60
(5) 都市計画	64
(6) われわれの都市に	70

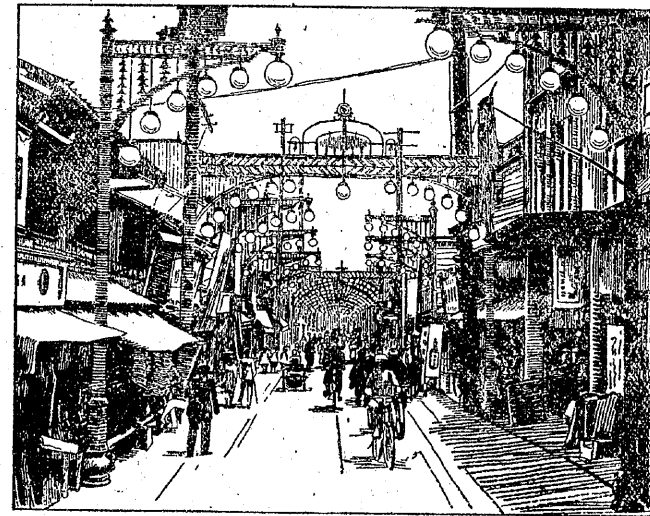
附録 わが国および外国のおもな都市表

は し が き

ある人が、いなかの子供たちに「町とはどのような所ですか。」とたずねたら、いろいろなおもしろい答をしたので、それらをノートに書きとめてみた。そしてこれを分類すると、だいたい二種類に分けられた。

その一つは、にぎやかな所です。人や車の通行がはげしい、品物をたくさん賣っている、工場がある、ほこりっぽいなどという答である。他の一つは、家のごみごみ集まっている、庭がせまくて畑がない、高い建物がある、ほそうされた道がまっすぐに通っているなどというのであった。

第一の種類の答をまとめると、都市は交通の中心となって人々が多く集まり、商工業が盛んに行われている場所となり、第二によると、



第 1 図 都市のにぎやかな通り

都市は、いなかのような耕地やあき地に乏しく、家が立てこんでおり、道路や町割りが計画的に作られている場所ということになる。この二種の答は、それぞれ都市の役割と外形とをいい表わしたもので、東京や大阪のような巨大な都市にも、地方の小さな町にも共通にあてはまる特長である。

しかし、もしもこれが昔の子供であったなら、その答にはすいぶん違った点が多かったことであろう。都市はこれまでに常に変化してきた。古い昔の都市と、今日のそれとを比べればもちろんであるが、われわれのおじいさんやおばあさんが育った時代と現在とでも、都市の大きさ・姿・役割・生活などに著しい差がある。

さて近代産業の中心地である現代都市の生活は、いかにも生き生きとしており、表面から見ればはなやかな点も多い。しかし都市の生活には、どこの国でもこれまでにいろいろな問題があった。人々の道徳・職業・労働・住宅・保健・交通などに関する諸問題をはじめとして、まだそのほかにもたくさん数えあげることができる。しかもわが国の都市のように、短い間に著しい変化をとげたものにあっては、ことに問題が多かった。

ところが終戦後はいっそう問題が増加した。おもな都市は戦災を受け、そのために住宅・保健・交通などの問題は、ますます深刻となった。また都市を中心として発達したわが国の近代産業も、大きな変化をしようとしており、これに関連して多くの問題を生んでいる。このような問題を早く解決して、わが国の都市を明るく住みよいものにしたいものである。しかし、これには都市の人々が努力しただけではだめである。いなかの人々の熱心な協力がなければ目的が達せられない。それほど都市といなかととは、種々な点で離すことができない密接なつながりをもっている。われわれも現在できる範囲内で、新しい時代にふさわしい都市の建設に協力しよう。

第一章 現代の都市

1. 現代都市の役割

現代の都市がいろいろな役割を持っていることは、そこにあるおもな建物を見てもわかるであろう。官公署、高等学校や大学、図書館・病院・銀行・会社・商店・映画館・劇場・旅館・工場など、実にいろいろな建物がある。都市は政治・文化・経済などの中心として活躍しているわけである。さらに都市には方々から道路が集中して、人々や種々な車の交通がはげしく、大きな都市になると、鉄道も四方から集まって、停車場も市内にいくつも設けられている。また電信・電話・新聞・ラジオなどのような通信や報道の機関もよくととのっている。これは交通・通信・報道の中心としても、都市は重要な役割を果たしていることを表わすものにほかならない。

都市の分布と形 このようにたいせつな役割をになっている都市は、わが国にはどこに、どのように発達しているであろうか。この状態を一目で見るために、都市の分布図を作ってみよう。

分布図の作り方にはいろいろあるが、

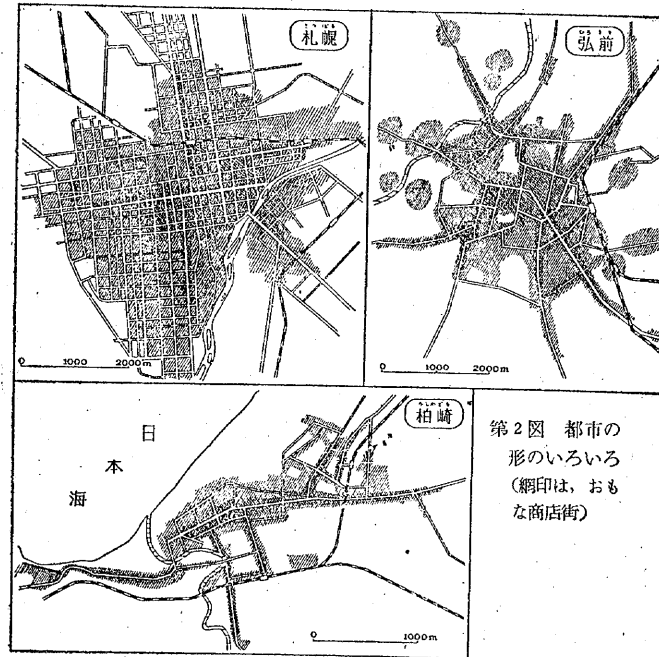
(イ) 人口の大小にしたがって記号を変えたり、あるいは、(ロ) 人口に比例した円の面積、または、(ハ) 球の体積で示すのもよい方法である。

たとえばこの教科書のはじめにある日本の都市の分布図は、(イ)と(ハ)の方法を合わせ用いて作ったもので、人口 10 万以下の都市は●印、それ以上のものは球の体積に比例させてある。

この図を見ると、わが国の都市の分布状態には、地方によって種々な特色があることに気がつくであろう。どんな特色があるかを、各自で読みとってみよう。

次にわれわれの知っている都市について考えてみると、それぞれ大

小の差のあることはいうまでもないが、その形にも、いろいろな違いのあることに気がつく。京都や札幌は、ごぼんの目のような正しい区画からなっていて、最初からよく計画して作られたものであることを示している。東京は部分的には区画が整然としているが、全体としての道路網は複雑である。そしてまわりから集まる街道に沿って人家が遠くへ放射状に延びている。また海岸や街道に沿って細長く発達した都市も、わが国には方々にある。地図によって郷土や、わが国のおもな都市が、どんな形をしているかを調べてみよう



第2図 都市の形のいろいろ
(網印は、おもな商店街)

わが国の工業地帯 わが国で近代的都市がたくさん発達している所といえば、だれでもまず、京浜・名古屋附近・阪神・北九州を思い出すであろう。それほどこの地帯には、新しい日本を代表する都市が集

まっているとともに、この地帯はわが国の工業生産の中核をなし、この工業製品は全国に取引されてきた。工業生産は、近代都市の営む役割の中でも、最も代表的なものとみることができる。

これらの工業地帯は、昭和10年(1935)ごろからいっそうその範囲を広げ、京浜工業地帯は附近一帯の鉄道沿線に延び、さらに茨城縣の日立その他に、飛び地のような形でその勢いが及んでいる。北九州工業地帯は瀬戸内海沿岸に沿って東に延長し、阪神工業地帯と、ほとんど手をつなぐありさまとなった。また名古屋と京浜とを結ぶ東海道本線の沿線や、伊勢海西岸の各地にも工業都市が発生するようになった。したがって四つに分れていた工業地帯は、一つの大きな工業地帯にまとまろうとしていた。この地帯の中にどのような都市があるかを、地図や都市分布図によって調べてみよう。

これらの工業地帯は、その生産の上からもそれぞれ特長を示してきた。戦前の統計によれば、まず京浜工業地帯で最も多くの従業員を持っていたのは機械器具製造で、中でも電気機械と電球の製造が目立つ。ついで金属精錬および化学工業が多い。従業員数はそれほどでもないが、印刷工業の発達は全国に類を見ないほどである。名古屋附近は綿布や毛織物の製造が盛んで、機械器具製造が第二位であり、瀬戸を中心が発達し、名古屋市内にも工場が多い陶器製造が第三位である。阪神は金属、機械器具工業を主とし、綿糸布の製造も多い。

以上の三工業地帯では、いわゆる100万都市を中心において、その周囲に工場や住宅地のある中小都市がとりまき、鉄道は網の目のようにそれらの都市の間をぬっている。これに対して北九州工業地帯は、人口10万前後の、大きさのぼろぼろ多数の都市から成り立っている。ここは炭田に近いことを特長とし、金属、機械器具および化学工業がおもである。

いったい、いつごろから、なぜこのような工業地帯が生まれたので

あろうか。これについてはだんだんに調べることにしよう。しかしさし当って注意しなければならないことがある。それはこの地帯の多くの都市は著しい戦災をうけてしまったことである。焼け野原のあちこちに、こわれた工場が、みじめな姿をとどめているのを見るにつけても、戦争のばかばかしさを身にしみて感ずる。諸都市がだんだん復興しているありさまには心強さをおぼえるが、もともとこの地帯の都市の発展は、あまりにも急速であっただけに、その生活にはいろいろな方面で改善を要する点が少なくなかった。しかし終戦後は、戦前とは比較にならないくらい、種々な社会問題が増加していることに注意しなければならない。またこの地帯の工業をどのように復興させたらよいかは、今後のわが國にとって最も重大な問題の一つである。

四大工業地帯のほかに、生糸、絹織物の工業を主とする都市が、関東地方北西部から西部へかけての山麓地帯や、長野・石川・福井の諸縣にやや古くから発達しており、富山や新潟を中心とする北陸の平野をはじめ、その他の地方にも新しい工業都市が生まれてきていた。これらの諸都市の今後についても、またいろいろな問題がある。

商 圏 どんな小さな町にも商店が並んでいる。商業は昔から都市の営む役割の中で、最も重要な地位を占めてきた。しかし町の店で買物をする人は、その町の人だけではない。周囲の村々からも人々が出かけてくるし、店の人が品物を村のお得意にとどけることもある。町は自分のまわりの土地へ商品を提供する役目をつとめている。大きな都市ではその範囲が廣く、小さな町では一般にせまい範囲に限られる。このような商業上の勢力範囲をその都市の商圏とよぶ。

鉄道や自動車の交通があまり発達していない地方の町は、近い範囲の村々を商圏としている。東北地方の町で、月に何回と日をきめて市が立つ日には、だいたい日帰りのできる範囲の周囲の農村から人々が出てきて、衣類や雑貨などを買って帰る。交通が不便な地方では、同

じくらの小さな商圏を持った町が、ほぼ等距離に並んでいる。しかし鉄道や自動車の交通が便利になると、交通上の位置に恵まれ、良い商品を豊富に持つ都市が栄えて、その商圏を大きくする。そしてその反対の条件のものは衰え、かくて都市の商圏は大小さまざまとなる。郷土の村の人々は、日用品などをどこの町から求めて来るであろうか。またその町の商圏は、だいたいどれくらいの廣さを持っているであろうか。

次にこのような町の店で賣っているものは、その町で生産されたものよりは、一般に他の大きな都市から仕入れられたものの方が多いことに気がつくであろう。してみると、その町はまた他の都市の商圏に属していることがわかる。

大都市は廣大な商圏を持っている。わが國で最も廣い範囲を商圏としている都市は、なんといっても東京と大阪とである。この両者が日本の國內商業の中心地としては両横綱で、この二大商圏によって、日本はだいたい二分されている。したがって両者の間には、商圏の拡大について、はげしい競争が行われてきた。

現在この二大商圏の境は、商品によって違っていて、なかなか複雑である。しかし戦前までは、だいたい中部地方の中央部を南北に横切る地帯あたりがその境となっていた。その中にあって、大都市名古屋は、次第に自分の勢力範囲を確立するようになってきていた。

このように都市はそれぞれ大小の商圏を持っているが、現在ではどの都市の店でも、商品が不足している。早く都市の工業生産を復興させて、豊富な品物をそれぞれの商圏に供給するようにしなければならない。そのためには、都市の人々が食糧に心配なく、自分の仕事にはげむことができるようになることがまず必要である。都市の人々は食糧を自ら生産しないで、これをいなかの仰いでいる。もっとも現在では市内でも園藝を行っていることもあるが、これは食糧の不足をわ

すかに補う程度にすぎない。だから都市の生産が高まるためには、いなかで食糧がどんどん増産されることが必要である。

しかし食糧が増産されるためには、また一方では、いなかで農具や肥料などが十分に供給されなければならない。しかもこれらは都市で生産されるものである。このように都市どいなかとは、生産という面だけから見ても、たがいに理解しあい、助けあって行かなければならないことがわかる。

いろいろな役割 商工業は、現代都市の営む役割の中で最も目につきやすいものであり、また重要なものである。けれども、たとえば東北地方の都市へいってみると、一般に近代的工場は少なく、あまり広い商圏を持たない地方的商業の中心地としての役割をつとめているものが普通であることに気がつく。これに反して東京から北九州にかけての工業地帯の都市には、数多くの工場や従業員の住宅などが立ち並んでいるものがたくさんある。してみると、われわれの知っている都市についても、商業と工業のいずれがおもに行われているかによって 商業都市・工業都市に分けられる場合が少なくないようである。



第3図 工業都市（八幡市）

さらに、ある都市の営んでいる特色のある役割に目をつけて、政治都市・学術都市・交通都市・宗教都市・鉱山都市・水産都市・観光や休養都市その他の区別もできそうである。ところが実際にやってみると、これらの区別がなかなか正確につけにくい場合が多い。それは現

代の都市は、いくつもの役割を同時に営んでいるのが普通であるからである。なお外国には、合衆国のワシントンやオーストラリアのカンベラのように、政治をおもな役割としている都市もあるし、イギリスのケンブリッジやオックスフォードのような学術都市（大学都市）もある。

わが国のおもな都市は、他の役割とともに政治・教育・学術の中心地としての役割もつとめているが、いろいろな施設の上で改善を要する点が少なくない。たとえば、われわれの学習に際しても、図書館が十分に利用できないことが多いし、科学・美術・郷土などに関する博物館が設けられている都市はごく少ない。すぐれた国々では、小さな町にもこのような施設があるとの話を聞くにつけても、なんとかして日本の町にも村にも、文化を発展させる施設をととのえたいものである。

研究事項

- (1) わが国の都市の分布図を地図と対照して、おもな都市の名まえを調べること。
- (2) 自分でわが国のおもな都市の分布図（都市の名まえを書き入れたもの）を描き、今後の学習に当たって常に利用すること。
- (3) 郷土附近では、どのような近代的工業が、どのへんで行われているか。それはいつごろから発達しはじめたか。
- (4) 郷土の町は、どこの商圏に属するか。町で賣っているおもな品物の生産地、その他によって関わること。
- (5) ある新聞が読まれる商圏（新聞の商圏）は、報道の上から重要な意味を持っている。郷土の都市で発行されている新聞は、どんな商圏に行きわたっているか。
- (6) 工業都市・商業都市、あるいは交通都市・鉱山都市・観光都市その他の代表的なものを多くあげて、その表を作ること。
- (7) 世界地図によって、世界のおもな国々の首府の名まえを調べて、その表を作ること。
- (8) 郷土の町や村の文化施設をととのえるに当たって、どんな点で助力できるかを討議すること。

2. 都市の人々

都市の人口 いなかから都市へ出てみると、よくもこんなに人々が多く集まったものだと驚くほどである。現在、市制を施行している都市は 200 以上を数えるが、その人口だけで日本の総人口の 33 % 以上を占めている。これら以外に大きな市街地を含む町村も少なくないから、都市人口はいっそう多くなるわけである。

年	市 数	市 部 人 口 (単位万人)	全国人口に對 する市部人口 の割合(%)
明治 33 (1900)	48	525	11.7
〃 43 (1910)	61	735	14.9
大正 9 (1920)	83	1,010	18.0
〃 14 (1925)	101	1,290	21.6
昭和 5 (1930)	109	1,544	24.0
〃 10 (1935)	127	2,217	32.7
〃 15 (1940)	168	2,758	37.7
〃 20 (1945)	205	2,002	27.8
〃 22 (1947)	214	2,586	33.1

第 1 表 わが國の市部人口の変化表

(統計局の資料による。昭和 20 年は 11 月 1 日現在、
他は 10 月 1 日現在。)

ス(イングランドおよびウェールズ)は 66 % で、都市に住んでいる人口がとびぬけて多く、オランダ・合衆國・ドイツなどは、40 % 以上を示す。そして日本はイタリアにほぼ近い都市人口の割合(37 % ぐらい)を持っている。

都市の人口密度は、すいぶん高い。いなかでは、田・畑・山林などに廣い面積を必要とするから、1 平方キロに住む人口は平均して 100 人にも達しない少数である。

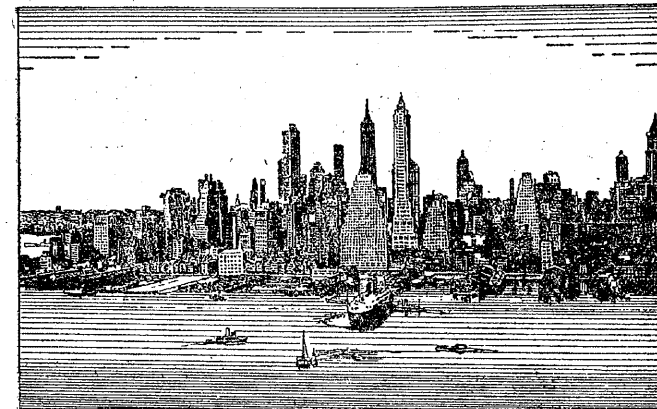
(注) わが國では、人口密度が 150 人以上になると、農業だけでは人口が養えなくなり、商工業者や勤め人が混じってくる。大都市近くの町村は、一般に 400 人以上の人口密度を示している。

ところが都市では 1 平方キロに 1000 人以上も住み、大都市の中心付近では 5 万人以上の高密度を示し、家々はほとんどあき地がないく

わが國では 2 万以上の人々が集まっていると、ころでは、人々の生活の各方面に、都市としての特色が、かなりはつきり表われてくるといわれている。そこで同じ標準で外國(1930~35)と比べると、イギリス(イングランドおよびウ

ちに密集している。

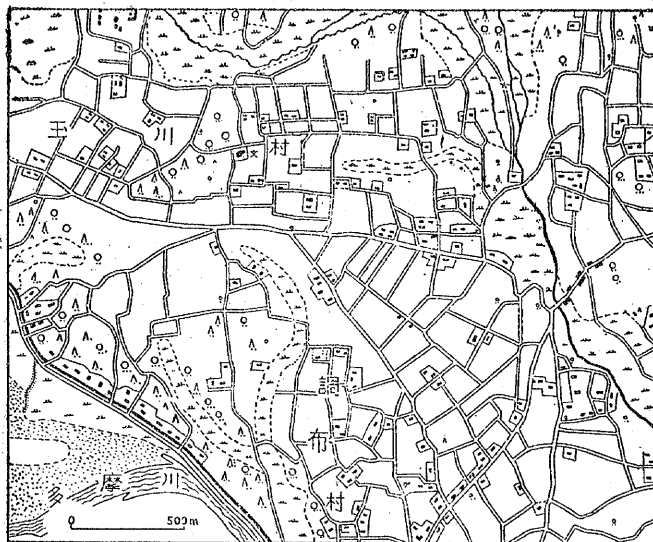
ニューヨークには摩天楼とよばれる数十階の塔のような高いビルディングがいくつもそびえていて、中には 300 メートル以上に達するものがある。日本の大都市の都心部(都市の中心地域)の建物は 8 階ぐらいが最高であるが(注、日本の建物には高さに制限が定められている)、それでもこれらは他の部分の建物に比べれば非常に高いものである。そして晝間はここに働く人々が集まるので、人口密度は実に大きなものになる。なぜこのような建物があらわれることになるのであろうか。大都市の中心部は、土地の値段が特に高いので、せまい面積の土地をできるだけ有効に利用しようとするからである。



第 4 図 ニューヨークの摩天楼

しかし都市の人口が増加し、人口密度があまりにも高くなると、好ましくない社会現象が、これにともなわれやすい。たとえば交通機関が混雑するし、人々は不健康になり、傳染病の危険も多く、またいろいろな犯罪が行われやすくなる。

次に第 5 図と第 6 図とを比べてみよう。同じ地域の地図でありなが



第 5 図 旧東京市郊外の一部
(明治 42 年測図、大正の末ごろまでは、このような状態であった。)

ら、古い地図には田や畑として表わされているところが、新しい地図では広く市街となっている。わずかな年数の間に、こんな大きな変化が起ったのには驚くほかはない。

急速な人口増加は、現代都市の著しい特色である。わが国では人口 10 万以上の都市人口は、昭和 5～15 年の 10 年間に一般に 20～30 % 増加している。ことに東京・大阪・名古屋は約 40 % の人口がふえ、新興工業都市の中には 60 % 以上の増加を示したものもある。10 万未満の都市人口の増加は、地方の事情によってまちまちで、あるものは 30 % を越す高い率を示すが、多くは 10～20 % の増加である。

これに対して、同年間におけるわが国全体の人口増加率は 11.8 % であるから、いかに都市の人口が急速に増加してきたかがわかる。そし

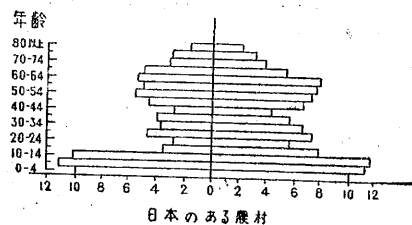
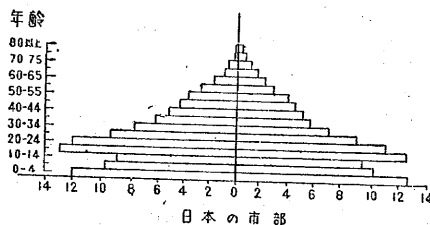
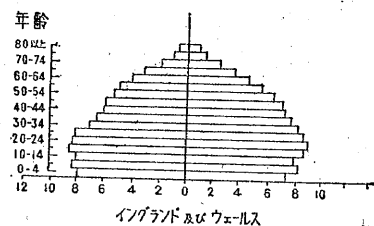
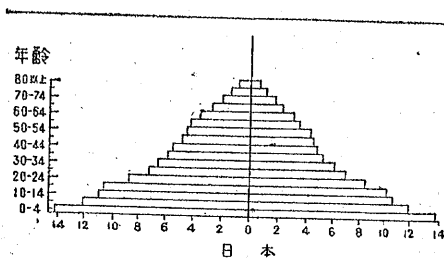


第 6 図 昭和 20 年現在の第 5 図の地域

で、これには、地方の人々が都市へ続々と集まることが、おもな原因をなしてきたことは、だれでも知っているに違いない。

現在は戦災や食糧事情に関連して、いなかから都市へ出る人も少なくなったようであるし、いまなおいかに疎開生活を続けている人もある。それでも都市はあい変わらず多くの人でにぎわっている。そして通りを歩くと、たくさんの若い働きざかりの人に出会う。いったい都市には何歳ぐらいの人が多く住んでいるのであろうか。これを調べるには、人口の年齢構成図を作ってみるのがよい。

第 7 図は、縦が年齢、横は、中央から左側が男の数の百分率、右側は女の数百分率を表わしたものである。出生者が多くて、人口が著しく増加しつつある国は、若い年齢の者ほど多いから、富士山形のグラフになる。これに対して、出生者が少なくて人口があまり増加しな



第7図 年齢構成図(1930年)
(館 稔氏の原因による)

いか、減少している国では、つぼ形を示す。わが国の人口は富士山形であるが、ヨーロッパには、つぼ形を示す国も少なくない。ところが大都市の人口のグラフは、一般に中がとび出た形になっている。これによって都市には働き盛りの人が実際に多いことがわかる。また、いなかから都市へ集まってくる人々は、おもに働き盛りの年齢のものであることも判断されよ

う。一方いなかの村の人口には、ひょうたん形を示す場合がある。これは若い人々が多く都市へ働きに出ていってしまったからである。

都市では商工業が盛んになるにつれて、多くの人手が必要となり、地方からの働く人々をたくさんよび寄せてきた。そしてこれは大都市ほどはなはだしい。

大都市の生活は、うわべだけを見ると、なかなかはやかなところが多いので、中にはこれにひきつけられて地方から出て来る者もある。また学校も大きな都市に集中しているので、地方から勉学に出て来る学生も多い。そして卒業後は都市で就職してしまう者も少ない。昭和10年の東京市の人口のうち、15歳以上の者について調べたところ1000人中の675人までが東京以外の他府縣から出て来たものであった。これによっても、いかに大都市の人口には、地方出身者が重要な部分を占めているかがわかる。

しかしながら大都市が、このように地方の人々をひきつけて、やたらに大きくひろがり、人口密度も高くなると、前にも述べたように人人の健康や安全その他の点で、いろいろな問題が生まれてくる。また大きな都市を維持するには、非常にたくさんの費用がかかる。これは戦後の日本にとって望ましいことではないとは、多くのすぐれた経済学者の一致した意見である。そのみならず、地方に働き盛りの人が少なくなってしまうことは、地方に遡っても、日本全体としても、好ましくないという点でも学者の意見が一致している。だから今後はこういうことを防がなければならないが、そのためには、地方にも新しい産業を起し、文化施設をととのえるなど、いろいろな対策を考えることがたいせつである。

都市生活のいろいろな場面 都市には同じ場所に三代続いて栄えている家がまれであると言われている。いなかへ来て、高くそびえる杉の屋敷林や、農家の古めかしい大黒柱をながめるにつけても、

これと比較して、都市生活の変化のはげしさを思わずにはいられない。

大都市に働く人々は、旧東京市の例からも判断されるように、一般にその半数内外が地方からの出身者であり、しかも大きな都市になればなるほど、各地からの人々が寄り集まっている。東京にいと、関西弁も、東北なまりのことばも聞くことができる。そこへは関東を中心として、全国から人々が集まっている。また大阪は主として北陸や近畿^{きんき}以西から集まった人々でにぎわっている。しかし地方にある中小都市には、その縣下から出て来た人が多い。

大都市の人々はこのように出身地がさまざまであるばかりではなく、同じ場所に長く住みついた人が少ない。同一市内にあって、よく住所を変える。住宅難の今日では、そう動けなくなったが、以前には年に一回ぐらいの割合に引っ越しをやっている人も少なくなかった。職業もよく変えるし、勤務先も変わりやすいので、自分の家を持っていると、かえってじゃまになることさえもある。それに新たに都市に来る人は多くは単身で、資力にも乏しいことなどもあって、都市では借家住まいが多い。大きな建物をたくさんの室にし切って住むアパートも、だんだんにふえてきた。共同生活にまだよくなれない日本人には、今日でもまだ一戸建ての家の方が好まれているが、ヨーロッパやアメリカでは、アパートの方が設備がよく、便利であるために、この方が多くの人に好まれている。もっとも日本には、設備のよくととのったアパートが少ないことにも注意しなければならない。

次に職業について調べてみよう。全国を市部と郡部に分けると、郡部では農業者が半ば以上をしめているが、市部では工業者と商業者がそれぞれ3分の1ずつ、ついで公務自由業が多い。一口に公務自由業といっても、その中には官公吏、学校の先生、医者・弁護士・文藝家・宗教家など、きわめて多種のものが含まれる。都市の人々の職業は実に多種多様である。

その上、仕事自身もこま

かに分かれている。商店を見て、いなかのようになんでも賣っているよろず屋はない。中心街になると、たとえば洋服のボタン専門の店すらある。げたの製作

について調べても、木の台を作る者、はなをのしんを作る者、その布を扱う者な

どに分かれ、最後にこれを仕上げて賣りさばく問屋がある。近代的工場では分業がいっそうはっきりしており、たとえばひとりの従業員は、一つのネジをしめる同じ作業を、一日は何回となくくり返す。その他の仕事についても、都市ではいろいろな専門に分かれ、人々は直接にあるいは間接に協力して仕事を行っているわけであるが、あまり専門的に分かれすぎているので、各個人には仕事の全体がわからないというような結果も起りがちである。

前にも述べたように、都市の人々は職業をよく変える。いなかでは代々にわたって農業にはげんでいる人が多いが、都市では親子が同一の職業につく場合は、むしろ少ないくらいである。だれでも自分の好む職業につこうとするのはよいことであるが、都市の生活は費用がかかって、経済的にもなかなか安定しないし、あるいは失業などによって、やむなく仕事を変えなければならない場合も多い。

このように都市では各人が別々な仕事をしているし、住居も時々変わる。隣近所の交際も一般に深くない。隣にどんな人が住んでいるのか、知らないことさえもある。そして人々は自分だけの利益を考えて、隣近所や市民全体の幸福を忘れがちになる場合が少なくない。

職 業	市 部	郡 部
農 業	40	602
水 産 業	7	22
鉱 業	3	10
工 業	339	151
商 業	312	105
交 通 業	73	27
公 務 自 由 業	136	56
家 事 使 用 人	51	19
そ の 他	39	14

第2表 わが國の職業別人口表
(昭和5年)
(國勢調査による。有業人口 1000 人に
ついての割合を示す。)



第 8 図 近代工場の内部（分業の例、製本の順序）

- 1.印刷された大きな紙を折る。2.ページ順にそろえる。3.とじて本にする。
- 4.表紙をつけて三方を切る。5.不良品の有無を調べて荷造りをする。

これはおたがいに不幸なことである。そしてこれでは都市の生活は、いつまでも改善されない。それに都市の風習、人々のものの考え方や態度などは、良きにつけ悪しきにつけ、いなかへだんだんゆき渡る。だから都市の人々がたがいによく理解しあって健全な生活を営むことは、新しい明かるい日本を作る上に、きわめてたいせつなことである。

研 究 事 項

- (1) 郷土の縣や郡の人口密度や、総人口に対する市郡人口の割合を計算すること。
- (2) 郷土の都市では過去数十年間に、人口がどれくらい増加したか。また市街地はどのように発展したか。
- (3) わが國の都市には、なぜ摩天楼が建てられないのであろうか。
- (4) 資料を手に入れて、郷土の村や町の人口の年齢構成図を作り、第7図と比べること。
- (5) 現在わが國のおもな学校は大都市に集中しているが、これは果たしてよいことであらうか。
- (6) あなたがたの学校が、もし都市にあるならば、学級の人々の父兄はいつごろからその都市に住むようになったか、また現在の住所に移ったのはいつごろかを調べること。
- (7) 郷土の村や町は、どのような職業人口からなっているか。また將來どのような職業につきたいと思うか。
- (8) 都市といなかの日常生活を比べて、著しく違う点を表にすること。
- (9) 都市の人々は余暇をどのように利用しているであらうか。それには改善すべき点がないであらうか。都市といなかとでは、人々の余暇利用法に、どんな違いが見られるであらうか。

3. 都市内部の地域

にぎやかな通りから横町や裏通りにはいと、そこは静かな住宅町である。人通りも少なく、車もまれにしか通らない。表通りからほんのわずかしき離れていないのに、町のようにすがすがしき違う。大都市の中のある場所には、軒なみに同じ品物ばかり賣っている問屋街があり、他の場所は右を向いても左を向いても工場である。コンクリート

の高い洋風の建物が並んで、外国へいったような感じを起させるところがあるかと思うと、また一方には木造家屋がこまごまと密集している地域も多い。このように同じ都市の内部でも、場所によって町の姿がずいぶん違っている。

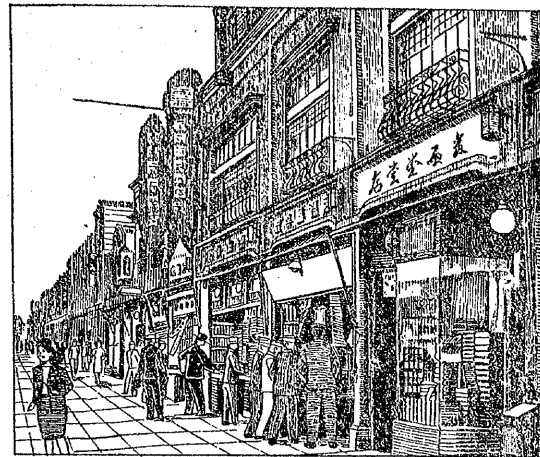
郷土の都市について、このような町の特徴を調べることは、おもしろいことに違いない。ところで、たとえばわれわれが住んでいる家の間取りにも、家によって相違があるように、都市によってそれぞれの地域の特徴や地域の組み合わせぐあいに違いがある。そこでこれらについて調べることは、その都市の性格を知る上にもたいせつなことである。もっとも日本の都市は、その内部も思ったより複雑な構造になっている場合が多い。しかし、たいいていの大都市では、大ざっぱに見て次のような地域を区別することができよう。

商業地域 都市は商人の作品であるときえられるように、現代の都市を発達させた大きな要素は商業であった。多くの都市では、商業地域の位置は、その発生が古いためからも、またその役割の上からも、都市の中心附近を占めている。道路や電車などの交通系統はここに集中しているので、周囲から買物に集まるのにも、他の地域との連絡にも便利である。そしてその都市で最も代表的小賣店や百貨店の集まる商店街を作っている。

都市が大きくなると、商店街は都市の中心部ばかりではなく、その他の場所にも方々に発達する。そしてところによっては、同業者が同じ場所に集まって特色のある町なみを作っている場合もしばしば見られる。たとえば大阪の道修町^{どうしやうまち}には薬問屋が並んでいるし、東京の深川^{ふかぎわ}の木場^{きば}には、材木屋や製材所が集まっている。

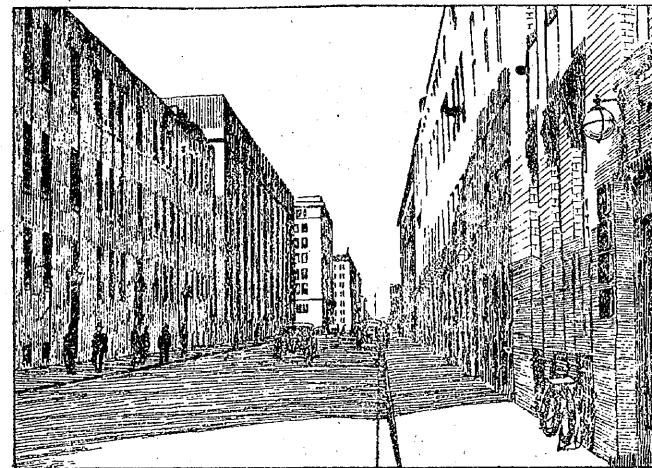
また東京の神田^{かんだ}のように、軒なみに本屋が続いている町もある。このように同業者がある場所に集まっている場合には、商業上どんな利益があるであろうか。

大きな都市では、同じく中央の商業地域の中にも、銀行や会社の高い建物が多く集まって特別なビルディング



第9図 本屋街（東京、神田）

グ街を作っている場合がある。ロンドンのシティ（City）とよばれるところは、せまい地域ではあるが、イギリスの経済活動の中心であり、



第10図 ビルディング街（東京、丸の内）

ニューヨークのウォール(Wall)街は、世界の商業取引に重きをなしている。東京の丸の内や大阪の中の島も、この種のビルディング街である。このようなところへいって見ると、晝間は通日も、建物の中も人人でにぎわって活気を呈しているが、夕方以後はすっかり静かになってしまう。それは、ここで働く人々の住宅は一般にここから離れており、ことに郊外住宅地から通勤する人が多いからである。したがってここでは晝夜の人口に著しい差がある。

工業地域 新聞や書籍の印刷工場や、その他の小規模な工場は都心附近でも見られることがある。しかし機械工業・化学工業などの工場は、都市の周辺の方にかたまっている。このような工業地域の位置は、地形や交通の便と深い関係を持っていて、水運の便のある三角州とか、鉄道の沿線などが工業地域として選ばれている。

工場はいかにも生き生きとした活動をしているだけに、さわがしい音を発するし、煙や、時によってはいやな臭気を盛んに出す。だからどこにでもやたらに工場が建つことは、市民の保健の上からも好ましいことではない。そこでである一定の地域を指定して、それ以外の場所には、工場の建設を許さないようにすることが必要となってくる。またこの方が工業の発展の上からも都合がよい。これを地域制とよんで都市計画の中でたいせつな仕事のひとつとなっている。

住居地域 だれでも事情が許せば、静かな廣々としたところに住宅を持ちたいと思う。しかし都心附近では、このような希望がみたされない。もし都心からあまり離れないところで、このような地域があれば、何かと便利である。中小都市では、それが城下町から発したものの場合は、その昔、城のまわりに武士が住んでいたところが、現在では一般に静かな住居地域となっている。

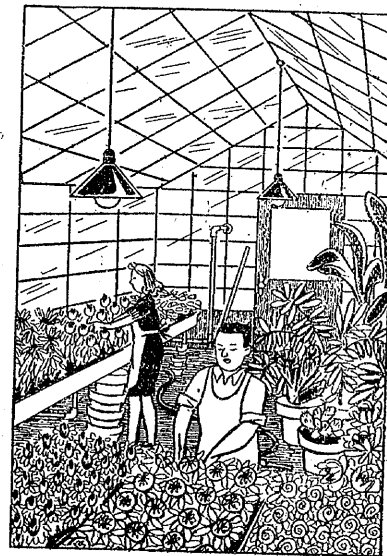
働く場所と住む場所とが近いのは望ましいことであるが、大きな都市内では、このためには、家々がこみあっていることをがまんしなけ

ればならない。このような住居地域も、わが國の大都市内には方々に散らばっている。しかし、市内は空気も悪いし、さわがしくもあるので、働くのに不便でない限り、どこかに適当な住宅地を求めたい。そこで交通機関が発達して、市内の働く場所へ通うのも便利になると、住宅は次第に都市のまわりや郊外の方へ移って行く。ことに距離も近く廣々した健康的な台地面には、どんどん家が建って、新興住宅地が生まれてくる。

郊外 都市が発展するにつれ、周囲の耕地や林野も次第に面積をせばめる。郊外へ行くと、畑の中に点々と立つ住宅や、道路に沿って場末の商店街が長く延びてきているのを見るであろう。これは都市が外部へ成長して行く前ぶれである。このようなところに都心に向かう電車やバスが通ると、駅を中心に市街地が芽ばえる。ある場合には、従業員の住宅をともなった

大工場があらわれたり、学校を中心とした田園都市などが計画されることもある。

附近の耕地を見渡すと、一帯に種々な野菜が栽培され、草花も植えられている。これは市民に供給するため、時によると温室で促成栽培を営んでるところもあるし、また乳牛の飼育や養鶏、養豚なども行われている。この地帯を通ってさらに遠くへ進むと、作物もだんだんに普通の農村で見ら



第 11 図 草花の温室栽培

れるものに移り変わる。このような変化は、人口密度にも表われるのは当然であろう。これを調べてみると、密度は都市に近いほど高く、1平方キロに1000人前後であるが、都市の周辺から遠くなるにしたがって低くなり、ほぼ400人を境として郊外の農村と普通の農村とに分かれる。

市街地から遠ざかるにつれて、周囲のけしきも、人々の生活も、このように次第に違って来るが、都市の行政上の境界は、市街地の周辺と一致していないことが多いことに注意しなければならない。

ある都市では、境界の外まで遠く市街地がはみ出している。この部分は、行政上は市外であるが、その生活は市内の連続である。人間のからだにたとえると、そこは胴体から出ている腕や足のようなものである。だからこのような部分を胴体から切り離して取り扱うことは、いかにも不自然なことがわかるであろう。そこで市域を拡張して、近接する町村を市内に編入することが必要となる。

新しい市の境界は現在および将来の政治・経済・交通その他の関係を考慮して、かなり外部に設けられるのが普通である。しかし、それでも急速に成長する都市では、これまでにいくども市域拡張をくり返してきたわけである。

研究事項

- (1) 郷土の都市では、役所・学校・銀行・会社などがどのように分布しているか。現在の分布状態で、市民の生活に不便がないかどうかについて討議すること。
- (2) 高い建物の屋上から、町の様子を見渡して、家々の立ち並び方、道路の状態その他で改善を要する点を考えること。
- (3) 都心からだんだん郊外の方へ行くにしたがって、町の姿や土地利用の状態がどのように変化するかを実際に観察すること。そしてこの教科書に書いてあることと違っていたら、それはなぜかを考えること。
- (4) 郷土の都市では、市域拡張がこれまでにどのように行われてきたかを調べること。
- (5) 東京は都制を施行しているが、市制とどのような点で違っているかを調べること。

第二章 都市の発達

1. 都市の起りとその移り変わり

老人から、郷土の都市のわずかな数十年前のありさまについての話を聞くにつけ、現代の都市とは、ずいぶん違った点が多いのに驚くであろう。昔と現代の都市とでは、その数も、大きさも、人々の生活も大いに違っている。ことに明治以後には、都市の役割が著しく変化して、多くの人口を養うようになった。もっとも、中にはかえってさびれてしまったものもある。しかし、郷土の都市について調べてみても、いまの都市が、昔の姿と全く縁がないわけではないことを知るであろう。位置もそんなに変わらないし、町割りにも、昔の形が残っていたり、ある場合には、それらをいっそう生かして使っている場合も少なくない。

一本の道路にしても、徒歩で旅行した時代の道すがらが、自動車交通の時代になっても、そのまま選ばれている例などは、方々に見ることができる。また戦災によって、ひどくやられた都市でも、以前の町なみが回復してくる芽ばえの力には、だれでも驚くほどである。都市は非常に変わりやすいものであるが、一方これらのことは、昔から今へとつながる生命が宿っていることを感じさせるものである。

そこで、自分の知っている都市、あるいは自分の住んでいる都市の過去について、調べてみたいと思うことには、いろいろあるであろう。いったい、なぜこのような都市が生まれたかということも、その一つであるに違いない。ところが、さて調べてみると、その発生の原因は、なかなか複雑なものが多く、しかもいろいろな変遷を経て今日に至っていることに気がつく。しかし、おもに次のような場合があげられよう。

政治都市 京都や奈良は、皇居を中心として発達した昔の姿を、

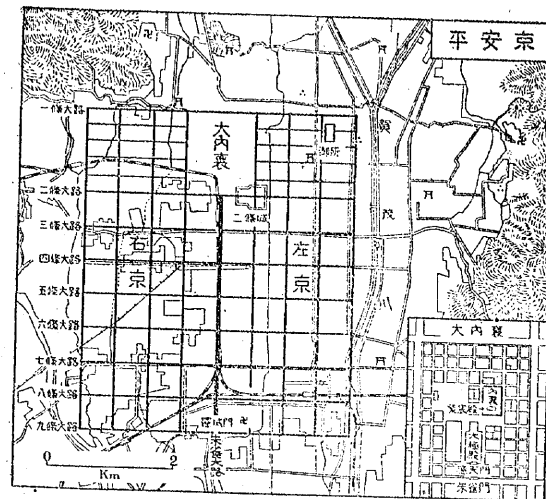
今日でもよく保存している。わが國で、最も古くから都市としての形がととのえられたのは、このような政治都市であった。中華・アジア・エジプトなどには、わが國よりも古くから政治都市が興っていた。それらは城壁を高くめぐらし、美しい宮殿を中心に、市民の家が立ち並び、最初から計画されてきたものであることを明らかに示している。

わが國で都市計画が行われた最初のものは難波京(大化元年、西暦 645)であるといわれている。これは今の大阪の位置に作られたが、孝徳天皇一代限りで他へ移轉してしまった。その当時までの都は、大和盆地を中心として、歴代その位置を変え、永続性のある市街とはならなかった。

これに対して、数代にわたって続いた都としては、平城京が最初のものである。これは唐の長安を手本として作られたもので、現在の奈良市の西方にあたり、土地は東西と南北に走る大路によって、規則正しく区分された。そして当時の都市計画の範囲は、現在の奈良市の4倍ぐらいの広い面積にわたって行われたが、市街はそんなに大きく発達したわけではなかった。しかし、今日でも大佛殿の黄金の棟飾りを新緑の森の間から仰ぐ時は、中國の歴史の古い都市をしのばせ、水田のつらなる大和盆地を若草山から望めば、農業の上からも、当時としては、すぐれた条件をそなえた土地であったことを知るであろう。

平城京について帝都となった平安京も、規則正しい町割りからできている。内裏(皇居)は、その北部中央におかれ、それから南に走る大路を中央として、左右対称に作られたものである。山城の國名が示すように、それは盆地の内に保護されたすぐれた位置を持ち、ゆるく南さがりの扇状地の上に乗っている。

最初は現在よりも西寄り、すなわち右京に町がひろがっていた。しかしこのへんは湿地であるためにさびれて、東山(ひがしやま)のふもとに当たって



第 12 図 平 安 京

営まれていたのであろうか。当時の主要な住民は貴族・官吏・僧侶などで、一般の市民は独立した生活を営んでいなかった。下働きには農民が交替で上京して、その役についたことも多いというから、今日の都市の場合とは非常に違っていたわけである。いなかの人々が農産物などを持って来て、都市で作られた日用品などと交換する場所である市場も開かれたが、それも官設であって、商人が自分の手で経営するものではなかった。しかし、西暦 1000 年以後になると、平安京の七條には、商工業地ができ、1400 年ごろからは一般市民の店があらわれ、大きな土蔵もだんだん建つようになってきた。けれども、商人全体がまとまった力を持つまでにはならなかった。

郷土をはじめ、わが國各地に、國府・府中などの名がつく所が多いことに気がつくであろう。これらは、古代の地方政治の中心で、今ならば縣廳がおかれた町に相当する。京都にならって作られたもので、中でも九州の太宰府は、特に重要な町であった。もっとも、当時は全

市街が成長しており、地形が町の発達に影響するよい一例を示している。

さて、平城京や平安京では、どんな生活が

國で70箇所近くも國府が置かれたが、今日の大きな都市の中で、その位置だけをついでいるものも、大阪・熊本・静岡・姫路・下関などにすぎない。

幕府がおかれた鎌倉は、三方は山に囲まれ、一方は海に臨んだせまい平地に生まれた町で、13世紀に最も栄えた政治・文化の中心地であった。多くの武士が住み、その需要に應ずるために商店街が設けられ、幕府の保護による社寺も方々に建てられた。しかし、都市計画はあまりよく行われなかったため、市街はそんなに整然とした形を示していない。現在は遊覧地・休養地としてにぎわっていることは、だれでも知っているであろう。

市場町 郷土附近には、二日市・四日市・八日市・十日市場その他これに類する名まえを持つ町はないであろうか。あるいは、そのような町の名まえは、だれでも聞いたことがあるであろう。それらは定期に開かれた市日が地名となったものであることは、その名まえから容易に判断されよう。交通も不便であり、商店も少なかった昔は、一般の地方では、近所の村々の人が集まりやすい場所に開かれた定期市によって、品物の取引がおもに行われた。そしてこのような市は、鎌倉時代ごろから各地に起ったが、はじめのうちは月3回、10日めごとに開かれるのが普通であった。しかし、取引がだんだん盛んになるにつれて、月6回、5日めごとに市が立つ場合が多くなった。

このように定期市の開かれたところには人家がふえ、やがて常設の商店があらわれるようになったことも理解されるであろう。市場から発達した町は、ヨーロッパにもその例が多いし、朝鮮のいなかでは、現在でも定期市が村の人々の日常生活にとって、重要な役割を果たしている。またすでに都市ができあがった今日でも、大通りや廣場を利用して定期市が開かれる例は、東北地方などにも見られるし、同様なことは、外國の都市の場合にもある。しかし、過去にはあのように盛

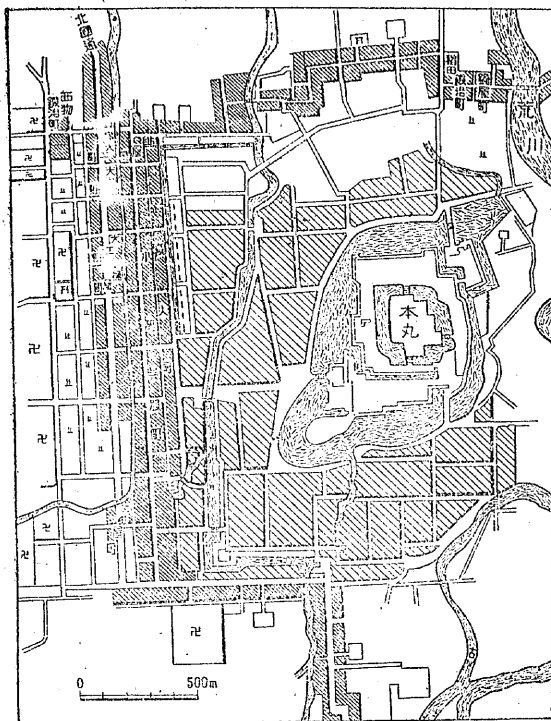
んであった定期市も、現在ではずっと衰えて、わずかに記録や地名にその跡をとどめるのが普通になってしまった。

城下町 今日わが國のおもな都市へ行ってみると、たいいていものには城の跡があって、その昔の町は、大名の居城を中心として、武士や商工人の家が集まってできたものであることを物語っている。このように城下町は、わが國のおもな都市の前身として重要な意味を持っているのである。もっとも戦國時代までの城は、山地や丘陵などを利用した要害の地に作られた小規模なものが多かったため、このようなところは、城下町の発達に適當ではなかった。

さて、江戸時代に近づくと築城法に大きな変化が起り、深いほり、堅固な石がきをめぐらした大規模な城が、平野の中の交通の便利な地点に築かれるようになった。このような位置は、都市の発達にきわめて有利な条件をそなえている。そして諸大名は城を中心として町割りを行って、城の近くに武士を住わせる一方、各地から商工人をよびよせて、その外側に商店街を作らせた。都市内の町名として、御徒・鍛冶・鍋屋・大工・桶屋・紺屋・呉服などの名まえが現在でも残されている例が方々にある。これらの分布によって、その都市が城下町であった当時の姿がしのばれるであろう。

地勢の複雑なわが國には、大小の平野や盆地が、離れ離れに方々に横たわっている。このようなまとまった地域を地盤として、城下町が各地に発達した。ことに廣い平野や盆地を背景とした大きな藩には、大きな城下町が出現した。そして城下町は各地域の軍事・政治・交通の中心地として、また経済・文化の中心地として、大いに栄えていた。

明治以後、鉄道や汽船が廣く利用されて交通が便利となり、商工業が盛んとなるに及んで、各地に大きな都市が発展した。この場合、城下町の位置は、近代都市の発達の上からも、一般にすぐれた条件をそなえていることがわかるであろう。それと同時に城下町が今日のわが



第 13 図 江戸時代の城下町の例 (高田)

はないことに注意しなければならない。江戸時代末に存在した 300 以上の城下町の中で、現在市制を施行しているものはその 3 分の 1 以下にすぎず、あとのものはたいした発展をとげるまでに至っていない。そこで東京・大阪・名古屋などのように、近代的大都市となったものは、特にどんなすぐれた条件に恵まれていたかを各自で調べてみよう。

城下町の建設に当たっては、いろいろな戦術上の苦心がなされた。たとえば、道路をわざと「かぎ形」にまげて、見通しを防ぐことなどは、普通に採用された方法である。このような道路は、今日の交通に

国のおもな都市の前身をなしている場合が多いわけ、容易に理解できるであろう。けれども、このような城下町の全部が、今日の近代的大都市として発展しているわけ

は不便なので、まっすぐに改められている場合が多い。

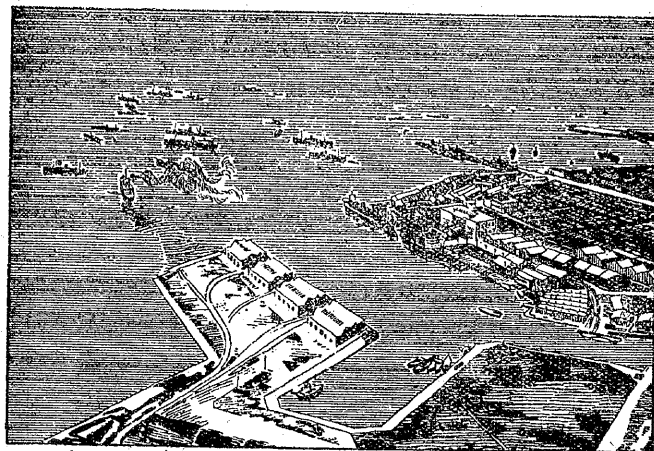
軍事的要地を中心として町が作られたのは、ヨーロッパでも同様である。ロンドン・パリ・ウィーンなどは、どれもローマ時代の城を核として発達したものである。また、マンチェスター・ハンプルクなどは、チェスター (Chester) やブルク (Burg) が城を意味することからもわかるように、それが城を中心として発達したものであったことが、地名に表われているものである。

港 町 大小の船が出入りし、陸上には倉庫その他の建物が並び、乗り降りする人々、貨物の積みこみや積みおろしでにぎわっている。そして、このような港の役割にもとづいて市街が発達しているのが、近代的港町である。港は近代経済に実に重要な役割を果たしている。しかし、わが国の古代には、交通も不便であり、産業も発達していなかったで、湖海の沿岸には漁村や小さな港が点在する程度にすぎなかった。もっとも、大陸との交通が古くから開けた瀬戸内海や北九州沿岸には、大阪 (難波津)、博多をはじめ、ところどころに港町が起り、琵琶湖岸には大津が開けていた。

やがて産業も次第に発達し、大陸との交通も盛んになると、海上交通の要地には港町が増加し、取引も盛大となり、ことに堺は、中世になると大陸との貿易上最も重要な地位を占めて、繁栄を誇るようになった。そして近世になって沿岸航路がますます開けるにしたがって、方々に港町が生まれた。

一方わが国には河川の長大なものがなく、しかも急流が多いので水運の便に乏しいが、陸上交通の不便な時代には、北上・信濃・利根・荒瀬などの河川には、小船による貨物の輸送が行われて、河港も発達していた。

ところで過去に栄えたこれらの町が、今日どれも近代的港町として重要な役割を果たしているとは限らない。大きな汽船が過去の小さな



第14図 近代的港(大阪)

帆船にかわった現代では、港としての自然条件も変わってきたし、道路や鉄道の発達、国内産業や外国貿易などに見られる変化も、近代的港としての条件に大きな変化をもたらした。そして現代では選ばれた少数のものが開港場として第一線に立っており、他のものは地方的物資の出入によったり、あるいは漁港を兼ねて、港町としての生命を保っているものが多い。

^{しゆくば}宿場町 終戦後は汽車がこんで、長距離旅行は苦痛になった。しかし、鉄道が発達していなかった時代の旅行は、それどころではなく、どんなにたいへんなことであつたろうか。東海道や山陽・山陰・北陸などの諸街道は、古くから主要道路となっていたが、一般の旅行者にとっては、宿泊の施設もとのわない状態が長い間続いていた。江戸時代になって、江戸を中心とする東海道・^{なかせん}中仙道・甲州街道・日光街道・奥羽街道の五街道をはじめ、これらと連絡する街道が諸地方に通じた。そして東海道五十三次、中仙道六十九次などといわれたように、

ところによって長短の差はあるが、平均 10 キロおきに宿場が設けられ、ここに宿場町の発達をみたのである。

この時代になると諸街道の交通もにぎわい、中でも^{さくせん}参勤交代の大名行列は、大がかりな旅であった。そして宿場町では、大名の宿泊にあてられた本陣と、人馬のつぎたてを取り扱う問屋を中心として、多数の宿屋が街道に沿って細長く並ぶようになった。

さて、宿場町は全く道路交通に依存して作られた町であるから、鉄道の出現によって、その繁栄にどんなに大きな打撃をうけたかは、容易に判断できるであろう。過去には宿場町として大いににぎわったものが、現在ではすっかりさびれてしまっているものについての話を、だれでも聞いたことがあるに違いない。しかし、中には宿場町としての役割を失っても、他の意味によって現代都市としてよみがえっているものも少なくない。



第15図 さびれた宿場町の例

門前町 郷土の社寺にも^{さんじにち}縁日や祭日があるであろう。その時には、

露店にいろいろなみやげ物や日用品などを並べた、にぎやかな市がたつ場合が多いに違いない。参詣人が年じゅう絶えない社寺の前では、このような市のかわりに、常設の商店や宿屋などができて、門前町が発達する場合が考えられないであろうか。事実、長野・宇治山田は、そのもとをたせば門前町から大きく発展したものであり、大社（島根縣）・成田（千葉縣）・琴平（香川縣）なども門前町としての特色をよく備えている。門前町は近世になって各地にその数を増したが、郷土近くにも、小規模ながら、このような町の例がどこかにありはしないであろうか。

外國にもその起源が宗教に関係を持つ都市が少なくない。ヨーロッパでは、古代ギリシアには、丘の上にアクロポリスとよぶ宮殿があって、その下に都市が発達していた。中世には教会や寺院を中心として市街が生まれ、それらのうち、交通の要所に当たるものは、近代都市として栄えている。またローマ法王のいるヴェチカンの町（ローマの一部）、ユダヤ教およびキリスト教の聖地エルサレム、回教の中心地であるアラビアのメッカなどは、信者のおとずれることが多く、今日でもにぎわっているし、海拔 3600 メートルの高所にあるチベットのラサは、ラマ教徒のめざす都市として知られている。

その他の町 都市の発達を促した原因は一つではなく、いくつも重なっている場合が多い。たとえば城下町は同時に市場町であり、あるいは宿場町・港町であるといったような場合である。その他、織物業・製陶業など、ある種の産業の中心地としてや、温泉・観光・鉱山の開発などのためにできた都市もある。さらに明治以後の交通や産業の発達によって新しい都市が急速に生まれ、また鉱山町も増加した。

中世・近世の商工業と都市の大きさ 都市といえば、まず商店街を思い浮かべるように、都市では昔から商業が行われていた。中世・近世の城下町には、たくさんの武士が住んで消費生活を営んでいたが、

一方、各都市には商人が集まって、次第に大きな商店が並び、にぎやかな市場も立って、國內商業もだんだん盛んになった。そして鎖國制度が定められるまでは、中國や南方地域などの外國との取引も行われ、その中心として堺や博多が大いに栄えた。

商業に対して工業はどんな状態にあったであろうか。今日の工業には、いろいろなやり方があることは、だれでも知っているであろう。大きな工場で、機械力を利用して大規模に行われているものもあるし、一方には家族の手で小さくやっているものもある。もともと工業は簡単な手工業から発達したもので、最初のうちはどこでも家族の者が余暇を利用して、織物その他、自分たちの生活に必要なものを作っていた。ところが室町時代ごろから、次第に各種の専門職人が多くなり、これらの職人は主として城下町に集まり、都市の工業化を促した。工業化といっても、いろいろな手工業が行われるようになったにすぎない。しかし、今日わが國の多くの都市に見られる織物・染物・金物その他の工業も、その源をただと、たいていのものはこのような手工業から出発したものであるし、また一般にわが國の近代工業には、小規模なものが非常に多いことに注意しなければならない。

鎌倉時代以後、大きな都市では商工業に従事する町人は、自分たちの利益と安全のために、たがいに組合を作って、経済的に強い地盤を築くようになり、こうして町人は次第に武士にかわって、世の中を実際に動かす力を持つようになった。そして都市がにぎわうようになるにつれて、貧しい農村から人々が競々と都市へのがれ集まって来た。けれども、当時の都市は、一般に今日の都市のように、多くの人口がささえられるほどには産業が発展していなかった。また一方では、米を作る百姓が減少するのを防ごうとして、江戸時代には、「人返し」といって、勝手に都市へは行って来た者を、村へもどす方法もとられた。一体皆の各都市は、どのくらいの人口を持っていたであろうか。古

い時代のものは、これを推定する手がかりに乏しいが、江戸時代については、各藩の石高や、その当時の書物に出ていた数字などとして、だいたいのことが推定できる。それによって、たとえば江戸時代中ごろ（17世紀末から18世紀のはじめ）の各都市の人口を見ると、江戸は町家人口だけで50万以上を数え、武士を加えると100万を突破し、全国第一の消費地であった。大阪は40万をこえ、商業が最も盛んで、全国の貨物を集散し、天下の台所といわれた。帝都として長い歴史を持つ京都は、商工業も栄え、50万の人口を持っていた。これらがわが国近世の三大都市であるが、これに続いては、金沢の12万、名古屋の10万、廣島の7～8万、仙台と長崎の5万余などが大きなものであった。三大都市を除いては、いかに一般の都市が小さなものであったかに注意しよう。

ヨーロッパでは、ロンドンやパリの人口は18世紀の初めに50万ぐらいいであったのが、19世紀初めにはロンドンが86万ぐらい、パリが55万ぐらいになった。ウィーンは18世紀初めに10万余で、19世紀



第16図 黒船の来航

になって25万、ベルリンは19世紀中ごろに、ようやく15万ぐらいいであった。これらのことを考え合わせ

ると、江戸がどんなに繁栄していたかしのばれるであろう。

江戸時代には国内の平和が続いたが、新しい技術なしでは、もはや生産を高めることができない状態にあった。その上、地震・水害・ひでりなどの自然の災害にしばしば襲われ、ききんが起ったことも少なくなかった。このように人々の生活も心もゆきすまっていたところへ、アメリカから黒船があらわれ、鎖国の日本を目ざめさせ、やがて明治維新を迎えた。そして外国の新しい文化がどんどん輸入され、ペリーが持って来た模型の汽車や電信機も本物となって、国民の生活に取り入れられるようになった。このようにしてわが国の社会に大きな変化が起り、それにつれて各都市の役割にもいろいろな変化がもたらされることとなった。

研究事項

- (1) 歴史的に有名な都市をたずねる旅行計画を学級で立ててみる。
- (2) 現在では、定期市が衰えてしまったのはなぜであろうか。
- (3) 歴史の書物によって、わが国では、どの時代にどんな港が栄えたかを調べる。そして現在はさびれているものについては、その原因を考える。
- (4) 現在のわが国の主要な開港場の分布、およびそれぞれの港が栄えている有利な条件について、地理の書物や地図によって調べる。また世界で有名な港についても同じことを調べる。
- (5) 郷土附近には、城下町として発達した都市としては、どんな例があるか。それらは近代都市として、どんな役割を営んでいるか。
- (6) 宿場町の移り変わりを示すよい実例について調べて、学級でその話をする。
- (7) 新しい開拓地である北海道の都市の起りには、他の地方のものに比べて、どんな違いがあるか。
- (8) 江戸時代のおもな都市の人口と、現在のそれとを比べる。そして都市によって人口増加率にどんな違いがあるか、また江戸時代にはあまり大きくなかったのに、現在は大都市に発展しているものの例を、できるだけたくさんあげる。
- (9) わが国のおもな鉱山町としてはどんなものがあるか。鉱山町の生活は一般の都市のそれと、どのような点で違っているかを調べる。

2. 近代工業の発達と都市

「大都市の川の水は、いなかの川のように澄んでいない。毎日、工場や家庭からはき出される汚水のために、水が黒く濁っている。「昔はここで水泳をしたよ」と、おじいさんにいわれても、ほんとうとは信じられないくらいである。それに、工場からは、いつもさわがしい音が聞えてくるし、林立する煙突からの煙は都市の空気を濁らせている。市街には電車や自動車などの交通が、目まぐるしいばかりである。古い建築様式の家々も残りが少なくなって、洋風の家が増加し、人々の日常生活も昔とはすっかり変わっている。なぜこのような変化が起きたのであろうか。

近代工業の発達 18世紀の末ごろ、イギリスで蒸汽機関や機械が發明されて、機械力がまず紡績業に應用され、大きな工場がマンチエスターなどの都市に建てられるようになってから、産業の規模は以前とは比較にならないほど大きくなった。この産業革命によって、それまでの数十倍、あるいは数百倍もの多量の、しかも質のととのった品物ができるようになり、また交通機関の発達にともなう、大きな重いものも短時間で遠距離に運べるし、人々も安全に自由に旅行できるようになった。人口の増加も著しくなり、多くの都市が急速に成長し、都市の生活もまるで変わってしまった。

この新しい生産様式が日本へ渡来したのは明治以後で、欧米諸國での開始よりも100年ぐらのおくれであった。このおくれを取りもどすために、明治時代の人々は非常な努力を拂った。政府は交通・郵便・金融などの制度をととのえとともに、官営の紡績工場・機械工場を設立し、鉱山を經營し、また博覧会や共進会などを開いて諸産業の振興をはかった。一方、民間でもいろいろな事業を興したが、間もなく財閥が起って、わが國の經濟を次第に支配するようになり、これがその後の日本に不幸をもたらす一つの大きな原因を作ってきたことは、注

意しなければならない事実である。

しかしながら、政府および民間の努力によって、ともかくわが國の産業が急速な發展をとげるようになってきた。すなわち明治の後半ごろから、新しい工業がいよいよ根を張り、芽をふき出した。第3、4、5表によって、このころから、いかにわが國の工業生産額が急速に増加したか、またこれにともなう、わが國の総人口や産業別人口にも、どんな変化が

起ってきたか
を読み取るこ
ととしよう。

年	米	生糸	綿糸	石炭	鉄
明治23年(1890)	100	100	100	100	100
〃 33年(1900)	120	206	634	284	118
〃 43年(1910)	159	345	1082	605	320

第3表 わが國の産業革命による生産指数の増加
(土屋霜雄、続日本經濟史概要による)

このように

して、古來農業をおもな産業としてきた日本が、工業的發展をはじめたわけである。ところで工業が主として行われるようになった場所はどこかといえば、それは交通の便がよく、原料・動力・労働力などを集めやすい都市である。そこでこのような都市では商業も盛んになり、それにともなう、地方からますます多くの人口をひきつけて大きく發展した。

年	総人口(単位1000人)	指数
明治 5年(1872)	34,806	100.0
〃 10年(1877)	35,670	103.1
〃 15年(1882)	37,259	107.0
〃 20年(1887)	38,703	111.2
〃 25年(1892)	40,508	116.4
〃 30年(1897)	42,400	121.8
〃 35年(1902)	44,964	129.2
〃 40年(1907)	47,416	136.2
大正 1年(1912)	50,577	145.3
〃 6年(1917)	54,134	155.5
〃 9年(1920)	55,963	160.8
〃 11年(1922)	56,798	163.2
〃 14年(1925)	59,737	171.6
昭和 2年(1927)	61,317	176.2
〃 5年(1930)	64,450	185.2
〃 10年(1935)	69,251	199.0
〃 15年(1940)	73,114	210.3
〃 19年(1944)	73,664	209.9
〃 22年(1947)	78,101	221.5

第4表 わが國の人口増加
統計局の資料による。大正9、14、昭和5、10、15、22年は國勢調査、昭和19年は人口調査(軍人、軍属を除く)、その他の年度は推計人口。

年	農業	水産業	鉱業	工業	商業	交通業	公務自由業	家事業	その他	計
人										
明治5年(1872)	14,100	395	6	827	947	118	502	172	7	17,073
大正9年(1920)	14,286	536	447	5,139	3,663	952	1,517	662	59	27,261
昭和5年(1930)	14,131	568	315	5,876	4,906	945	2,005	802	71	29,620
昭和15年(1940)	14,358	581	628	8,570	5,072	1,466	2,486	709	227	34,096
昭和19年(1944)	11,667	405	778	9,132	2,116	1,589	2,721	434	113	28,955
%										
明治5年(1872)	82.6	2.3	0	4.8	5.6	0.7	2.9	1.0	0	100
大正9年(1920)	52.4	2.0	1.6	18.9	13.4	3.5	5.6	2.4	0.2	100
昭和5年(1930)	47.7	1.9	1.1	19.8	16.6	3.2	6.8	2.7	0.2	100
昭和15年(1940)	42.1	1.7	1.8	25.1	14.9	4.3	7.3	2.1	0.7	100
昭和19年(1944)	40.3	1.4	2.7	31.5	7.3	5.5	9.4	1.5	0.4	100

第5表 わが國の産業別人口の変化（人口單位1000人）
（明治5年の分は中川友長氏、その他は統計局の資料による）

そしてその後わが國の商工業が盛大におもむくにつれて、市制を施行する都市の数も著しく増加した。（附録、日本の都市表参照）

都市へは新しい工業様式が輸入されたばかりではなく、明治以後わが國へはいつてきたいろいろな西洋文化も、まず都市で吸収され、都市の生活は著しい変化をとげるようになった。

紡織工業の発展 わが國には古くから、小規模な家内工業が行われ、絹織物・麻織物・陶磁器・漆器などの製造が行われていた。しかし、わが國の産業革命は 政府の保護・奨励のもとに、まず紡織工業から起った。主として合衆國の需要によって生糸の生産は急激に増加し、本州中央部の盆地や山麓地帯には、桑の栽培面積が著しく拡大された。製糸業は岡谷をはじめ、地方の中心都市に盛んになり、生糸は戦前まで重要な輸出品をなしてきた。また古い歴史を持つ絹織物業も、その規模がずっと大きくなり、京都府・福井縣・石川縣・関東平野の西部山麓地帯その他の都市の絹織物の生産が増大した。

綿の紡織も、もともと地方的自給自足が行われていたが、外國からの安い綿の輸入によって、これも近代化した。そして東京から東海地方・瀬戸内海を通過して北九州に至る地帯の諸都市のように、労力や輸

送の便などに恵まれたところには、多くの資本が下されて紡織工場が続々と生まれ、中國や南方地域へも多量に輸出されるようになった。さらに近年人絹工業がおこるに及んで、これまでの綿および絹織物業地では、人絹織物や人絹交織物の製造が盛んに行われている。

一体、機械力を利用することによって、それ以前とは生産額にどんな相違が起ったであろうか。これを綿糸製造で比較すると、手でつむぐよりは、初期の機械によっても約80倍、その後の新しい機械によれば数百倍の額を示す。それで1900年ごろまでには工場生産が普及し、副業として綿をつむいでいた農村ではこれをやめてしまった。かくて都市といなかとの分業が次第に明らかになり、たがいに助けあって進むようになった。製糸の方は簡単な器具（座繰機）が普及し、これはかなり長く農村でも使用されていたが結局これも工場生産にその地位を譲ってしまった。いなかの古い家には、綿をつむいだり、生糸をとったりした昔の道具が、物置のどこかにしまっているかも知れない。



第17図 座繰機と近代製糸工場の内部

これを工場の機械と比べてみるにつけても、数十年の間に行われた生産様式の変化の大きいのに驚くことであろう。

重工業・化学工業の発達 紡織工業を代表とする、いわゆる軽工業に対し、製鋼・機械製造・金属精錬・造船その他の重工業は、その発達が少しくおくれた。製鋼といえば、まず八幡製鉄所を思い浮かべるように、これはわが國の製鋼業の発達に重大な関係を持っている。明治34年(1901)に作業を開始したこの製鉄所は、北九州の石炭を動力源とし、日本各地、朝鮮、中華民國の揚子江沿岸、南方のマライなどの鉄山から鉾石を仰いで盛大な製鋼が行われ、これに続いて、他の重工業も次第に興った。ことに第一次世界大戦に際して、それまでは主として輸入にまっていた多くの工業製品が、著しく不足するようになったので、その自給をはかり、ために各種の重工業や、薬品・染料・紙・ゴム・肥料などの化学工業も急速な発展をとげた。たとえば機械器具工業についてみて、第6表から、第一次世界大戦中に、いかに大きくなったかがわかるであろう。

年	工場数 (単位百)	生産額 (単位億円)	工員数 (単位万人)
大正3年(1914)	14	1.1	9
〃 8年(1919)	59	7.2	24
昭和4年(1929)	45	6.3	25

第6表 わが國の機械器具工業の発展
(土屋霏雄、続日本経済史概要による)

これらの重工業や化学工業も都市で行われ、これも東京から北九州に至る諸都市に主として集中した。かくてこの地帯はますます多くの人口を集めて、これまでの都市もどんどん大きくなり、また新しい工業都市も続々と生まれて、川の下流沿岸や海岸の低地には、大小の工場が並び立つようになったのである。

なお北海道の工業は、新しい開拓地のものとして、他の地方のそれと違った点が多い。これについては、各自で調べてみよう。

工業的發展にともなう諸問題 このようにして工業的發展をとげたわが國の諸都市には、いろいろな社会問題が生まれてきたことを見

のがしてはならない。たとえば急速な人口集中によって、短期間に大きな都市に発展したために、近代都市としての種々な準備が間に合わなかったことが多い。そのために保健・交通・美観その他の点で、改善を要すべき点が少なくない。それに多くの大都市は戦災をうけ、これに関連して種々な問題が起っている。これらについては、次の章で考えてみることにしよう。

さらに近代工業の発達それ自身に関連しても、種々な問題がある。たとえば工場や機械の所有者と、工場にやとわれて働く人々との間に、いろいろないざこざが生まれてきた。ことに近代工業では、大量の品物をできるだけ安く生産しようとするために、工場の施設、工員の待遇や労働時間などについては、産業革命以来、どこの國でもいろいろな問題を起してきた。そしてわが國の場合も、その例にもれない。また近代工業といえば、だれでも大きな工場で、多数の従業員が働いているありさまを思い浮かべるが、これまでのわが國の工業は、一般に果たしてこのような規模のものであったであろうか。第7表によれば、わが國の工業の規模は一般

に著しく小規模で、工員100人未満の、いわゆる中小工場が大部分であることが判断されるであろう。ここでは小さい資本(もとで)

都 市 名	東 京	大 阪	名 古 屋
調査した工場数	4,5573	5,2713	1,8430
工場数の%	100.0	100.0	100.0
工員5人未満	66.2	79.6	68.2
5—29人	27.5	17.2	28.5
30—99人	4.9	2.5	2.5
100—199人	0.8	0.4	0.4
200人以上	0.6	0.3	0.4

と、安い労働力とによって、品物を安く生産していたのであり このような経営は、

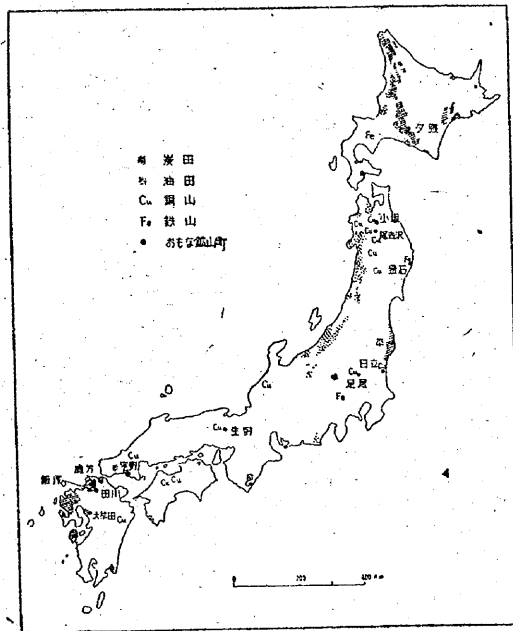
第7表 工員数から見たわが國の工場の規模 (昭和13年)
(日本都市年鑑による)

わが國の工業に一つの大きな特色を與えてきた。

ところで現在では、わが國內および世界の状態は、戦前とはすっかり変わっている。これからの日本の工業をどのように発展させたらよ

いは、根本的大問題である。しかもこれはなかなか簡単には解決できないが、それについても一方では、工業の再建に密接な関係を持つわが國の天然資源のことも、深く考慮しなければならない。

天然資源の中でも、たとえば工業と特に深い関係がある鉱産資源(地下資源)について考えてみよう。わが國は鉱物の標本國であるといわれるくらいに、多種の鉱産資源を持っている。しかし、たいていのものはその産額がわずかで、國內の需要をみたすことができない。石油や鉄のように、工業を行う上に欠くことができないたいせつな資源には、きわめて恵まれていない。石炭・銅などは比較的多い方である



第 18 図 わが國のおもな鉱産分布

な問題である。(天然資源の諸問題については、社会科教科書「天然資源」およ

が、これとても十分とはいえない。それに終戦後は石炭産出高の減少に加えて、種々な社会的な悪条件が重なり、電力にも著しい不足をつげるようになってしまった。これらの短所をどのようにして補ったらよいかも、また重要

び、私たちの科学 11、「地下の資源をどのように利用しているか」を参考すること)

このほか、わが國の都市生活や都市の工業的復興については、まだまだたくさん問題がある。そして國民はこれらの解決に向かって協力一致して真剣な努力を拂わなければならない。

研究事項

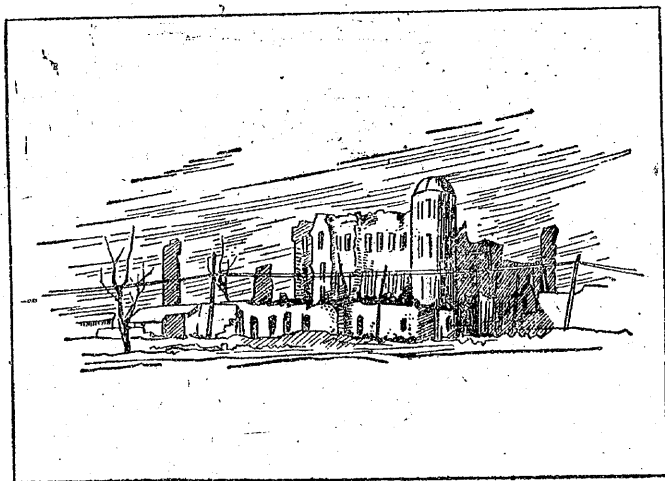
- (1) 産業革命以前と以後とは、郷土の文化施設や産業の狀態に、どんな変化があったであろうか。
- (2) 附録の都市表によって、わが國の都市(市制を施行したもの)の数が、どのように増加してきたかを、図表や分布図にして示すこと。
- (3) 世界地図によって、世界には大都市がどのように分布しているかを調べること。そして、それは工業の盛んな地域の分布と、どんな関係があるかについて学級で討議すること。
- (4) 地理の書物と地図によって、わが國のおもな製糸業地・絹織物業地の分布を調べる。輸出品としての生糸の重要性には、終戦後どんな変化が起ってきたか。またそれはなぜか。
- (5) わが國の名高い陶磁器・漆器の産地、およびそれぞれの産地の製品の特色について調べること。
- (6) 郷土附近で行われている工業の中で、まだまだ近代化されていないものを調べる。それはどんな様式で行われているか。また製品はどんな販路を持っているか。
- (7) 昭和 22 年に制定された労働基準法によって、わが國の労働者の條件が、どのように改められたか。これについてよく知っている人に、わかりやすく説明してもらうこと。
- (8) わが國の天然資源について、さらにくわしく調べる。石炭や石油の増産のために、どんな努力がなされているか。最近有望な油層がどこかで発見されたか。また現在わが國および郷土の天然資源の利用について、どんなことが最も問題となっているか。
- (9) 都市といふとは、その生活にどんなつながりを持っているか、学級で討議すること。

第三章 これからの都市

1. 燃えない都市

特別火災警報の出ている日のことであった。急にけたたましいサイレンの音がして、消防自動車走って行くので、その方向を見ると、黒煙が盛んに立っている。空気が乾燥し、風があったので、たちまち密集していた5、6軒の家屋が類焼してしまった。出火の原因や、この火災がすぐに消し止められなかった原因としては、いろいろなことが考えられよう。しかし、もしもコンクリート建てのように燃えない家屋からできていたら、こんな結果は招かなかったであろう。

復興の姿 空襲によって見るかげもなく焼け野原と化した戦災都市にも、だんだん新しい家が建てられてきた。地方の中心都市には、復興が割合に順調に進んでいるものが多いが、大都市ではまだわずしか家が建てられていない。赤さびたトタン小屋が、焼け跡を利用し



第19図 ある戦災都市の風景

た野菜畑の中に、わびしく立っている風景さえも見られる。さいわいに焼け残った家々や、ようやく新たにできた小さい家には、3世帯も4世帯もの家族が同居している場合も少なくない。それどころか、住む家のない気の毒な人々さえもある。どんな不自由な生活をしのんでも、たがいに助けあわなければならない現在である。それにしても、わが国の現在の財政難・資材難・輸送難などを考えると、いつになったら戦災都市の復興が完成するであろうかと、心細いような気持ちに襲われることさえある。

焼け跡の小高い所に1本のいちょうの大木が立っている。幹の内部は黒こげになり、皮もはぎとられ、とうてい生きていけそうにもない。しかもこの幹から若芽がたくさんふき出ていて、その生活力の盛んなのには驚くほかはない。そうだ、われわれもこのいちょうの木のように、たくましく、ねばり強く復興に向かって進むことにしよう。

いちょうの木にはげまされて、周囲を見渡す。あちこちに新築の木造バラックが目につく。現在は家の形をしてさえいれば、どんなそまつなものでもほしい時である。なにしろ戦災都市の指定を受けたものは119市で、わが国の市数の半分以上に及び、焼失した家屋は約235万戸（全国では約246万戸）、これに疎開によって、こわしたものなどを加えると約300万の屋が失われた。1戸5人平均にしても1500万の人が住みかを失ったことになる。だからどの都市も住宅難がひどい。そしてあとからあとから、防火設備が不完全な急造の木造家屋が建てられて行く。しかし復興はこの調子で進められてよいものでしょうか。「われわれが、いま、急行列車に乗っていたとする。そしてどこかの都市へさしかかった際に、ふと窓から外をながめたとする。こういう場合に、かりに『日本』というものを、すっかり忘れてしまっていたとしたら、車外の光景は、何よりもまず現実と思えない印象を興るに違いない。おそろしく延びひろがった都市、都市。ぴったりとくっ

都 市 名	戦災前の 戸 数	戦災戸数	戦 災 率 (%)
旧 東 京	13,140	7,738	58.9
大 阪	5,684	3,078	54.2
名 古 屋	2,696	1,362	50.5
横 浜	2,067	993	48.0
神 戸	2,000	1,282	64.1
佐 世 保	1,075	313	29.1
川 崎	762	355	46.6
廣 島	673	500	74.2
福 岡	649	157	24.2
呉	587	283	48.2
長 崎	545	184	33.8
尼 崎	531	128	24.1
仙 台	522	120	23.0
八 幡	505	141	27.9
堺	436	150	34.5
熊 本	425	100	23.5
靜 岡	423	245	57.8
下 関	414	105	25.4
和 歌 山	411	282	68.6
鹿 兒 島	380	175	46.0
大 分	359	125	34.8
岐 阜	349	205	58.7
浜 松	326	220	67.5
岡 山	322	230	71.5
富 山	321	225	70.0
西 宮	306	155	50.8

第8表 おもな都市の戦災状況
(戸数単位, 100)
(復興局の調査による)

持はしないであろう。しかし事実、世界の文明国の中で、このような危険な都市は、他に例を見ないのである。

火の用心をすることはたいせつである。しかし、さらに進んで燃えない都市をつくったらどうであろうか。

過去の都市の家屋 ヨーロッパやアメリカの都市も、過去には木造家屋がおもであった。現在のような燃えない都市になるには すいぶん大きな努力を拂ってきたのである。たとえばロンドンでは 1666

つきあっている木と紙の家。機関車からはき出される火の粉一つで、たちまちにして1軒はおろか、30 軒、40 軒、さては一区画全体すら、ほのおに包まれてしまふであらう。路地には多数の板べいがあって、脱出も困難であろうし、それに強風でも加わったとしたら、それこそ都市全体が灰になり、幾千の焼死者を出すことにもなるであらう……。乾燥した木材・紙・壁などのような、いわばたきつけの集積からなる都市、都市。」これは、ある外国人の、日本の都市についての印象文であるが、こんなことをいわれると、あまり良い氣

年の大火ののち、思い切って木造家屋をやめ、れんがと石造とに改めた。これに比べて、わが國ではどうであつたろうか。

江戸時代初期の江戸の家々の屋根は、いなかの農家と同じように、草ぶきや板ぶきであった。しかしあまり度々火災がくり返されるので、瓦ぶきに改めさせ、また土蔵をつくることをすすめ、町には火よけのために空地を設けたりした。ところが明治以後、都市がいつそう大きくなったにもかかわらず、防火については、消防が機械化された以外にはあまり進歩しなかった。コンクリート建築もふえてはきたが、おもに官廳・銀行・学校などに限られ、それもそばに木造家屋があるために、いつも類焼の危険にさらされている。こんな状態であつたから、こんどの空襲によって、ひとたまりもなく焼けてしまったのである。

燃えない家屋 今日のわが國民は戦争放棄の決意をかため、この達成に向かって努力している。しかしながら火災の危険は、これによっても少しも減じない。それは過去の平和時代のことをふりかえてみても、戦後の現在をみても明らかであらう。近くは大正 12 年 (1923) の関東大震災によって、44.7 万戸の家が焼失し、20 万人以上の死傷者を出したし、函館の大火 (昭和 14 年, 1939) や、静岡の大火 (昭和 20 年, 1945) など、まだ人々の記憶に新たな例である。また毎年春先は火事の多い季節であつて、昭和 22 年だけでも全國で、1,9000 件近くの火災が起つている。火災は長年にわたって蓄積した財産を、全くむだに失わせるばかりか、死傷者さえも多数出す。なんとかしてわが國でも、今後は燃えない都市をつくりあげたいものである。それにわが國は、地震・台風その他の自然的災害に襲われることが多いから、火災ばかりでなく、これらの災害に対しても強い家屋を建てる必要がある。今日ではこのような建築に関連する、種々な新しい研究も進められているから、燃えない都市をつくることも、決してむずかしいことではない。もちろん短い年月の間には、達成しにくい事情が

いろいろあるであろう。けれどもあらゆる困難に打ち勝って、この目標に向かって進まなければならない。

もともと戦災都市の復興とは、單に戦前の状態にもどすことではない。わが國の都市には、木造建築という点だけではなく、そのほかいろいろな欠点が少なくない。これらについてよく調べて欠点を除き、住みよい都市をつくりあげることに協力することが、われわれのたいせつな役目である。

研究事項

- (1) 火災警報にはどんな種類があって、どんな時に発令になるか。
- (2) 郷土の戦災都市では、復興がどの程度に進んでいるか。それについて調べて地図に書きあらわすこと。
- (3) 各家庭で、火災防止に対してどんな点に注意したらよいかを討議すること。そして学級で協力して、火災防止のポスターをつくること。
- (4) 燃えない丈夫な家屋としては鉄筋コンクリート造りがよいことは、だれにも理解できよう。コンクリートの原料であるセメントの生産状態はどうだろうか。また燃えにくい建築様式としてはどんなものが考えられるか。

2. 健康的な都市

健康な人は、毎日の仕事が楽しく正確に行えるが、不健康な人にとっては、働くことが苦痛であり、仕事の結果も不正確である。これと同じように、健康的な都市では、市民のすべてが愉快に働くことができ、その結果は生産の能率が上がり、都市もりっぱな成長をとげる。われわれは自分の身体にはとにかく注意するが、社会全体の健康には、無関心すぎる点がありはしないか。そして目に見えない多くの損失を受けてきたのではなからうか。

都市の位置 中華民國では、昔から都を定める位置として、北に山を負い、南に湖があり、東に流水、西に大道がある位置を理想としてきた。この條件を、そのまま現代にあてはめることはできないとしても、この例は、都市の保健上、まず土地を選ぶことのたいせつさを

教えるものである。たとえば低湿地に家屋が集まっていることは、保健上好ましくないことは容易に理解できよう。このような土地では少し雨が續くと、すぐにじめじめしたり、海岸では高潮^{たかしほ}によって浸水したりして、いつも傳染病が流行しやすい。またわが國のように地震が多い所では、少し大きい地震があると、このような土地では家がつぶれたりして、被害がはなはだしい。北風に吹きさらされた所よりも、山かげの日当たりのよい土地が住みよいことはいうまでもない。

このように位置は保健の上に重要な関係を持っている。だから村や町の地形上の位置についても、よく調べて、保健の上に不利な点は、なんとかしてこれを補うように努力しなければならない。

上下水道 今日ではわが國の都市は、たいてい水道を利用するようになった。これによって都市では傳染病がずっと少なくなった。水道が普及する以前には、どの都市でも、せきり・腸チフス・コレラその他の傳染病のために、どんなになやまされたことか。水道の普及は現代の都市生活の大きな改善といえよう。けれども水道の水だからといって、いつでも安心してはおられない。チフスやせきりが水道によって、かえて流行した例もある。しかし近ごろは消毒法が進歩したから、このような心配が少なくなった。それでも戦争中は水道施設の修理、改善もよく行われなかったし、戦災によっていたんだりして、今日ではいろいろな欠点が目についてきた。わが國の都市の水道を、防疫の立場からよく調べて、今後ますます改善しなければならない。

わが國は雨量が多いから、水には不自由しそうもないが、事實は大都市では、夏になると水道の水不足になやまされ、水の節約がさげられることは、いつも経験するところである。このような時には、われわれは一致協力して節水につとめなければならない。けれども一方では、水を節約することによって、市民の保健上にもいろいろ好ましくない結果をもたらすことも忘れてはならない。衣類^{せんたく}の洗濯も十分に

行えないし、街路その他の清掃も、おろそかになりがちである。人々が生活する上に、水が何よりもたいせつであることは、だれにもわかっていながら、大都市では、なぜこんなに水不足をきたすのであろうか。わが國では明治以後、人口の急激な都市集中が行われ、都市は年々急速に大きくなってきたのに対して、水道をはじめ、その他の文化施設の進歩が、これと歩調を合わせて進むことができなかったのである。だからあらゆる文化施設を、すみやかに改善することがたいせつである。ことに下水道についてはこの感が深い。

下水道を完備すれば、保健上どんな利益を得るであろうか。消化器系の傳染病は大いに除くことができるし、寄生虫病もなくなるはずである。しかし現実として、わが國には下水道の完全な都市が、どれだけあるであろうか。一般の家庭では台所の排水設備も不完全であるし、水洗化された便所も少なく、非衛生な状態のくみ取り便所が普通である。くみとった汚物は、そのまま肥料として用いるから、寄生虫の卵が野菜について不健康の源となる。これは文明國として、考えなければならぬことである。だから一日も早く下水道の完備に向かって努力しなければならない。

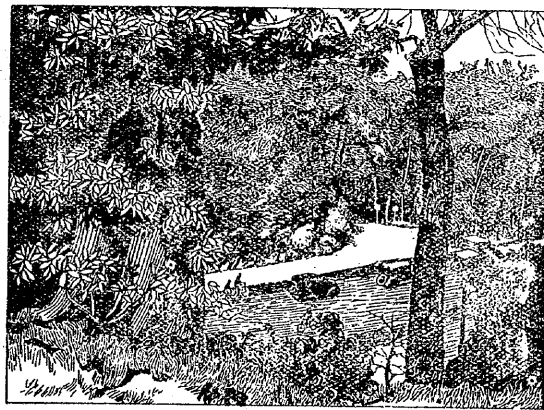
もっとも、これはひとり都市ばかりについての問題ではなく、いなかについてもいえることである。けれども都市の人口密度は、一平方キロにつき 1000 人以上、ときには 5 万人以上にも達し、一般のいなかの場合のような 100 人以下とは比較にならない高密度である。だからいなかでは、それほどにも感じない小さなことも、都市ではゆるがせにできない重大な影響をもたらすわけである。

家屋 人々の仕事の場所も いなかと都市とではずいぶん違っている。いなかでは、一家そろって外へ出て働く時間が長いが、都市では室内にとじこもって仕事に従事することが多い。したがって都市では、家屋の通風や採光によほど注意しなければならないわけである。

ところが、わが國の都市の家屋の状態はどうであろうか。戦災を受けた都市では、一戸に数家族が住んでいる場合もめずらしくはない。一人当たり 2 畳半の面積は、わが國の住宅として最低生活であるといわれているが、これに合格する家は、大都市では 10 % を越えないであろう。もともと日本人は客間や玄関を飾ることに意を用いてきたが、住むへやや台所、事務室や工場などの日当たりや換気には、あまり関心を持たなかった傾向がありはしないであろうか。

またニューヨークに見られるような摩天楼の集まりは、いかにも現代都市發達の最高の状態を示すものとして、一面には望ましいことのようにも思えるが、その反面には、高い建物の間は深い谷のように日陰になり、通風も悪くなる欠点がある。これに対して、わが國の多くの都市のように、小さい家屋が密集して立てつまっている場合も、程度はもっとひどいが、同様な結果をもたらすことも容易にわかるであろう。

公園 都市では室内で仕事をしていても、いつも外のさわがしい音が聞えてくる。一步外へ出れば電車・自動車・自転車などが絶え間なく通って目まぐるしいばかりである。都市の生活は実に神経がつかれる。せめて生活にうるおいが與えられ、気分も休まり、適度な運動もできるような緑地がほしい。



第 20 図 都市内の公園

合衆國では、都市によっては、人口 100 人につき 40 アールの公園を標準としているが、これに対してわが國の都市の現状はどうであろうか。たとえば東京では 0.0072 アール、神戸では 0.0189 アールで、全く比較にならない。もともと日本人は、自然を深く愛する國民である。以前は住居地域ではもとより、商業地域でも、わずかな庭に木を植えたり、鉢植えをするのが人々の楽しみであった。また夏を涼しく暮すためにも、種々な木の茂みがつくられていた。それが年がたつにつれて、次第に家が立つてつまって、空地が少なくなってしまうのである。だから、なり行きにまかせておけば、ますます都市の生活は、うるおいに乏しいものになってしまうであろう。市街のいたる所に小さな公園や運動場を設け、いつもそこで休み、身体をねることができる。また市中の数箇所には大公園をつくらせて、そこでは都市の中であることを忘れるくらいにしたいものだ。

休日を利用していなかへ行くと、すがすがしい気分になる。水も空気が清らかであるし、日光にも恵まれている。そして、いかにも都市の空気が濁っていることがよくわかる。俗に大阪の「すすめ」は黒いといわれるように、工業が盛んであった当時、たとえば昭和 15 年には、大阪市内に、年に 2,5000 トンのすすが降っている。これによれば、人々が 1 日に吸う空気の中には、工場地域では 18.4 ミリグラム、商業地域では 16.1 ミリグラムのすすが含まれる計算になるという。これが直接に人々の呼吸器を害するばかりでなく、日照を弱め、紫外線を少なくして、健康に悪い影響をもたらすことは明らかであろう。公園を設け、工場の立つ場所を制限したりして、この悪い影響を少なくすることが必要である。またわれわれはできるだけ野外に出て、よい空気を吸い、身体をねろう。

病 氣 一年間の死亡率を全國平均と都市とで比べてみると、大正 14 年にはそれぞれ 20.3 % 18.9 %、(注、%は 1000 人についての率を表

わす)であったが、昭和 10 年にはそれぞれ 16.8 %、14.7 %に減じて、両方とも少しずつはよくなってきている。都市の方が全國平均よりも死亡率が低いのは、ちょっと不思議なように思われるが、もともと都市には働き盛りの若い人が多い上に、医療設備がととのい、衛生知識も進んでいるからである。しかし結核による死亡率は、かえって都市が高くなっている。たとえば昭和 10 年の統計によれば、全國の平均が 1.9 %であるのに対して、都市では 2.4 %を示している。しかも他の傳染性の病気が減りつつあるのに、結核による死亡率が増加しつつあることは、実に寒心に耐えないところである。都市の人は中学校卒業までに、すでにその半数に近い人が、結核に感染した経験を持つといわれている。それにいなかから都市へ働きに出て、結核に犯された人が郷里へ帰って、いなかの人々の間にこの病気をひろめていることも、注意しなければならない事実である。もっとも最近、B. C. G. の予防接種の効果が次第に表われてきたのは喜ばしいことである。それにしてもわが國の都市生活には、保健という点だけからでも、ヨーロッパやアメリカの都市生活に比べて改善を要する点が多い。

年 齢	市 部	郡 部
0—4	8.5	4.2
5—9	26.6	11.0
10—14	37.3	19.4
15—19	64.6	27.8
20—24	77.4	38.9
25—29	36.3	47.5
30—34	85.2	48.8
35—39	86.9	53.1
40—44	86.9	49.4
45—49	85.1	51.7
50—	77.0	53.7

第 9 表 わが國の市部、郡部別ツベルクリン反應陽性率の比較(%)

良田圭子氏の調査(人口問題研究、第 4 卷、第 2 号、昭和 18 年)による。この表はこれまでの調査の中で、最も広い範囲にわたる資料から作られたもので、これが信用できるものであることは、厚生省でも認めている。

研 究 事 項

- (1) 郷土の村や町の位置(地形から見た)には保健の上から、どんな長所や短所があるか。また短所を補うために、どんな努力がなされてきたかを調べて、学級で討議すること。

- (2) 郷土の水道やガスの施設について調べて、消費節約の必要性およびその方法について討議すること。
- (3) 学校の体格検査の結果を図表にし、これを近くの学校や全国平均のものと比べること。そして劣った点があれば、その理由および対策について討議すること。
- (4) 夏時間は、都市の人々の健康に、どんな利益をもたらすであろうか。学級で討議すること。

3. 交通を愉快に、安全に

大都市やその附近に住む人々は、朝夕の交通機関が混雑するので苦んでいることであろう。交通事故によって死傷する人が出ない日は、ほとんどないばかりでなく、超満員のために、電車のモーターが焼けたり、窓ガラスがこわれたりする。

なぜこんなに乗物がこむのであろうか。またこのような混雑をなくして、毎日の通勤や通学を愉快にするには、どうしたらよいであろうか。

ラッシュアワー 京浜・阪神などの大都市附近の地図を見ると、郊外電車線に沿って、アミーバの足のように市街が外へのび出している。またバスは駅から遠いところに住む人々の便利な足となって、その沿線を次第に都市化する力となっている。郊外電車やバスがなかった時代には、このような市街は発達していなかった。

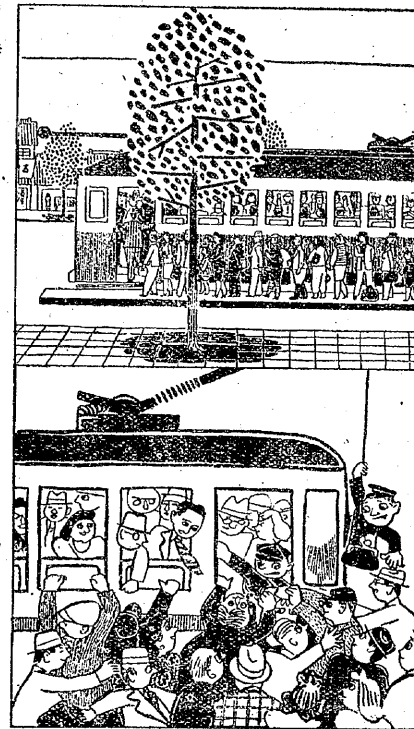
このように都市がだんだん大きくなる一方、交通機関の発達によって、郊外との連絡が便利になると、市内には事務所・商店・工場などがふえてきて、住宅地は次第に郊外の方へ移って行く。そこで夜は郊外にある住宅に寝て、晝は市中へ出て働く人が増加した。このために朝は市内に向かう交通機関が満員となり、夕方は反対の方向のものがこむ。この時間がラッシュアワーである。

ラッシュアワーの混雑ぶりは、終戦後はますますひどくなった。ことに市内の住宅が大半焼失した戦災都市では、焼け残った郊外住宅地

や、もっと遠い所から、市内に通う人々の数が著しく増加した。これに反して、鉄道や道路もいたみ、車台数もへって、輸送力は以前とは比較にならないほど少なくなった結果、今日のような混雑をきたしているわけである。

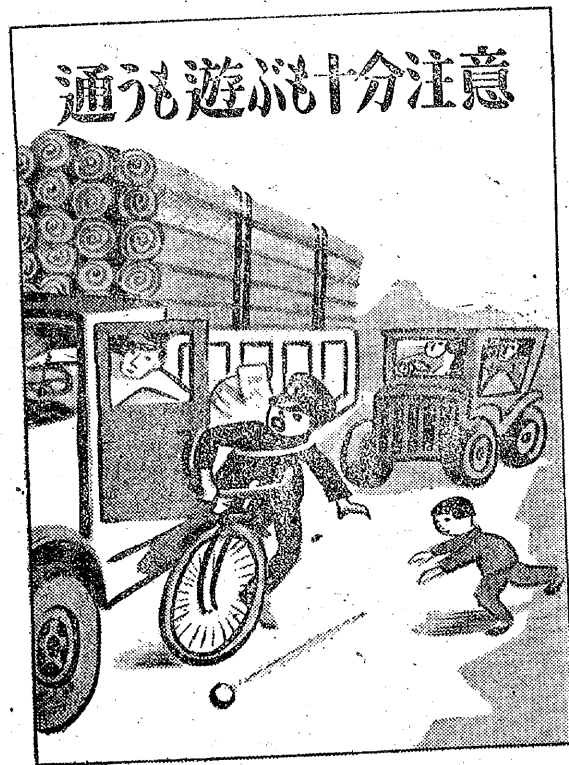
混雑の緩和、交通の安全 交通の混雑を緩和するためには、鉄道をたくさん敷設し、汽車や電車の回数を多くすることもたいせつである。また道路をととのえて多数のバスを方々に通ずるとともに、できれば合衆國のように、自

動車をほとんど各戸で持つようになれば、どんなによいであろうか。もっともこれは現在としては、その実現は、そうたやすくは望めないことであろう。しかしそれ以外にもいろいろな方法がある。住宅を仕事の場所にできるだけ近く置いて、徒歩や自転車、自轉車で通えるようにするのもよい。たとえば郊外に工場や大学を移し、これに附属して住宅地を作れば、通勤に楽なばかりではなく、目当たりのよい庭や野菜畑を十分に持った健康な生活を送ることができるであろう。



第21図 乗物の混雑
(どちらの乗りかたがよいか)

また市内には数階建ての燃えない集合住宅を作って、わずかな距離で職場に着けるようにしたらどうであろう。そして毎日の往復にむだに使う時間や労力を仕事に向けたり、余暇を楽しむようにすれば、ど



第 22 図 交通安全ポスター

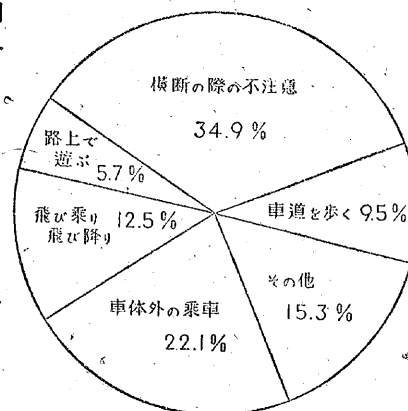
んなにかわれわれの生活は向上することであろう。ところでこのような計画が実現されるまでには年月や費用がかかる。差し当たって毎日の交通の混雑を、少しでも緩和する方法

がないものであろうか。いたんだ交通機関を修理することは、一日も早くしなければならぬ仕事である。しかし一方では、人々が秩序を守ることが、どんなに交通緩和、安全に役立ち、毎日の交通を明るくするかはわかり知れない。人々が乗降に先を争うために、乗物の停車時

間を長びかせ、これがまた乗物の混雑をいっそうひどくさせている。電車やバスの来るのを見ると、よく長い時間待たされたのちに 2、3 台かたまって來ることがある。先の 1 台に争って乗るので、その車だけがますます混んで時間もおくれる。続く車は空いている場合が多いので、間もなく先の追いついてしまう。これなどは乗客が少し気をつけさえすれば、車の間隔は平均し輸送力を増すことができるわけである。

道路の横断はいつも直角に行うことや道路で遊んだりしないことも交通の安全の上からたいせつである。交通事故は、なんといってもけがをした人に最も気の毒であるが、そればかりではなく、たいせつな荷物を運ぶ車を止め、急ぐ用の乗客にむだな時間を費

やさせて、人々の活動をにぶらせる。交通の改善は何よりもまず、われわれの身近かなところから始めることにしよう。



第 23 図 交通事故統計 (総件数 819)

昭和 21 年度中、警視廳管内 (旧東京市およびその附近) 交通事故発生原因別表 (歩行者および乗客側に原因があるもの)

研究事項

- (1) 郷土附近の交通機関のラッシュアワーは、だいたい何時ごろから、何時ごろまでかを調べること。
- (2) 合衆国で行われている学校バスの組織について調べ、わが国で同様なことを実施しようとするには、どんな困難があるかについて討議すること。
- (3) 郷土近くの交通事故の統計を手に入れて、その原因を調べ、交通事故を少なくするには、どうすればよいかについて討議すること。

- (4) 昭和 23 年 1 月 1 日から実施された道路交通取締法について調べること。
(5) 交通の改善をはかるために、協力できることがらについて討議し、その結果を実行すること。

4. 都市を美しく

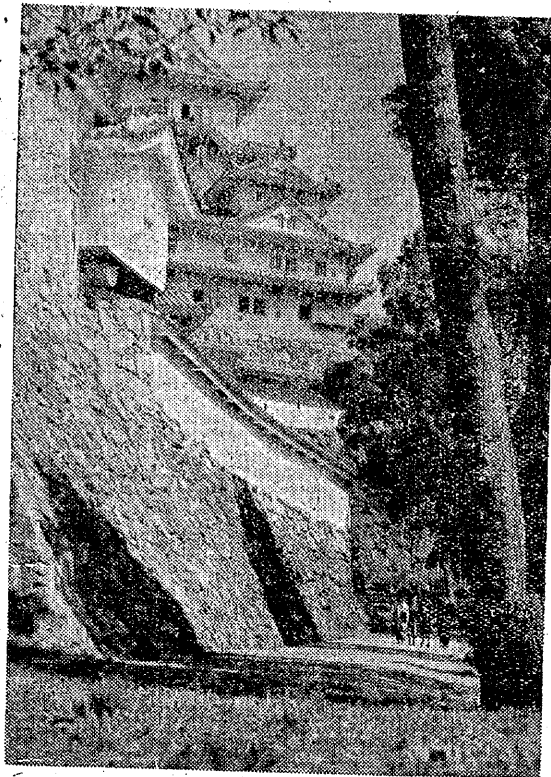
こがらしの吹いている寒い冬の町のことである。1 台の車をひいた道路清掃人（塵芥作業員）が、シャベルを持ってちりを集めていた。道の上には落葉や、どろにまざった紙くすやタバコのすいがらがすてられてあった。かれは数メートルいってはちりを集め、また数メートル進んではちりを車に入れていた。車の通ったあとは、きたなかった道路が見違えるようにきれいになった。どんなにりっぱにほそうされた道路でも、よごれた姿は美しいとはいえない。一体なぜ道路がこんなによごれるのであろうか。またわれわれは道路の清掃を、清掃人だけにまかせておいてよいものであろうか。

自然の美と人工の美 都市が美しい要素には、道路・建物・橋などのような人工の美のほか、その都市を包む自然の美がある。そして、この両者がよく調和していることが必要である。京都や奈良が美しいのは、そこがなごやかな山々にかこまれ、美しい自然に包まれている上に、古い社寺を中心とした人工の美が、これによく映りあっていることも大きな原因をなしている。わが国には自然美にすぐれた位置を選んで発達している都市がたくさんある。

われわれの記憶に、美しい都市として残されているものについて、その自然美がどんな特色を持っているか、またそれが人工の美と、どのように調和しているかを思い起してみよう。また郷土の都市の美しさには、自然や人工の美がどのように関係しているかを調べてみよう。

人工の美は都市によっていろいろである。たとえば古い社寺、高くそびえる城の天守閣、江戸時代から明治にかけて建てられた瓦葺きの

土蔵なども、落ちついた都市の美しさを作っている。しかし最近はいこれらの古い美が次第にこわされて、これにかわって、新しい美がふえてきた。大きなビルディング、鉄骨がにじようにかかる大川の橋などは、近代の技術に

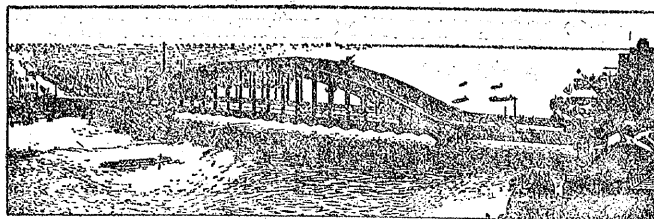


第 24 図 古城のおもかげ

よって作られた美しい都市の風景である。

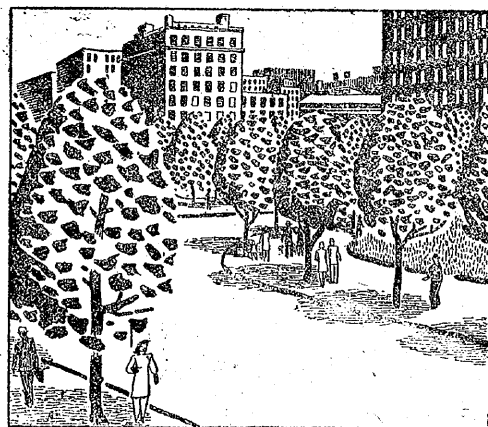
近代都市には生き生きとした美しさがある。常に列車が走るレールは光って美しいように、現代の都市には活動する姿の美しさを方々に見ることができる。大きな起重機が運轉されている工場、高架線を走る電化列車、大通りの絶え間ない自動車の流れなどに対して、だれでも働き動く美しさに眼を見張ることであろう。

しかしその反面、現代の都市では自然美が次第にそこなわれて、そ



第 25 図 近代的な大きな橋

の結果うるおいに乏しくなり勝ちである。この欠点は、いちよう・あおぎり・プラタナスなどの街路樹や、公園のいろいろな樹木によって、どんなに補われているかはかり知れない。また川・堀・池などの岸に並んだ樹木が、水と相映じている風景も実に美しい。これに反して、戦災やその他の大火災のために街路樹が焼失した道路は、両側に家々が建ち並んだあとでも、なんと殺風景なことか。樹木は都市美にうるおいを與えるばかりではなく、都市の空気を清める上にも大いに役立つ。われわれは街路樹や公園の樹木を愛護しよう。



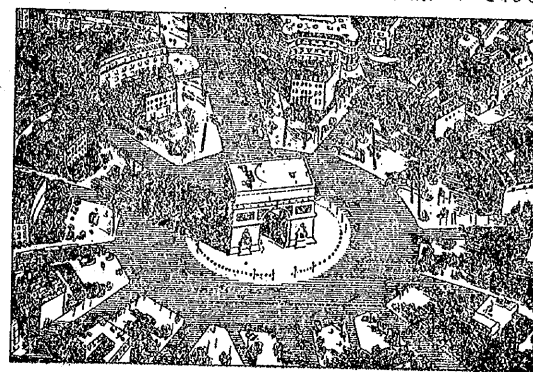
第 26 図 街 路 樹

みにくい風景
たとえ自然の美にとりまかれてりっぱな建物が並んでいても、道路がぬかるみであったり、紙くずやごみがちらばっていたり電柱が乱れ立っていたらどうであらう。またベ

ンキでみにくい文字や絵を書いた看板^{かんばん}が方々にかかげられていたり、隣どうしの建物の高低がでたらめで、町なみが不ぞろいであったり、あるいは堀や池の水が、きたなく濁っていたりしたらどうであらうか。わが國の都市には、このようなみにくい風景が見られないであらうか。

文明國の都市のおもな通りでは、電線も地下に埋められたり、看板も制限されて、廣告塔にまとめられている場合が多いので、街の見通しが一般にさっぱりしてる。それに都市内の道路は、ほとんどみなほそうされ、よく清掃されている。そして人々は道路を家の廊下の延長と考えているので、そこにつばをはくことなどは、いかに非衛生であるかをだれでもよく知っている。これに比べて、わが國の都市ではどうであらうか。

個性の美しさ 風景美は日本にとって、外國から観光客を迎えるに際しても、たいせつな資源の一つである。どこの都市でも、きれいな姿をもって観光客を迎えたいものである。それにつけても必要なことは、個性を持つことである。たとえば北平・パリ・ニューヨークは、それぞれ東洋・ヨーロッパ・アメリカを代表する美しさを持つ都市として知られ、世界の人々をひきつけている。それらの風景にはそれぞれ特色があって、他の都市をまねた借り物ではない。郷土の都市の美しさには、どんな特色があるか調べてみよう。



第 27 図 パリの星状街

またわが國の各都市でも、それぞれの美しさの特色をよく生かすようにしよう。

研 究 事 項

- (1) 郷土の都市の美しい点や、みにくい点について調べること。
- (2) 外國のおもな都市の美しい点や、みにくい点について調べて、日本の都市のそれと比べること。
- (3) 郷土の都市を美しくするために、どんな助力ができるかについて討議すること。
- (4) わが國の都市の住宅は、コンクリートや板の塀で囲まれていることが多いが、この風景は果たして美しいであろうか。
- (5) 「わが國の都市美と観光」という題で作文を書くこと。

5. 都 市 計 画

ある中学生の日記の一節、「おじさんの家に用があったので、使いにいった。市電の終点で下車すると、ごみごみした狭い町で、しかも道路は、以前たんぼ道であったと思われるように、うねうねと曲っている。町名番地はおぼえて来たが、なかなか見つからない。30分以上もさがしたあげく、やっと見つけて用がたせた。町割りが規則正しかったら、このようにむだな時間を費やさなくてもすんだことと思う。その上、終点の附近の土地は、低くてじめじめしていて、大雨でも降ると、すぐに水がたまりそうである。そしてそこには日当たりの悪い家が建てつらなり、ここに住む人の健康にもよくないと思った。このようないささかを見るにつけても、近ごろ盛んに論ぜられている都市計画ということが、確かに必要なことがよくわかったような気がした。」

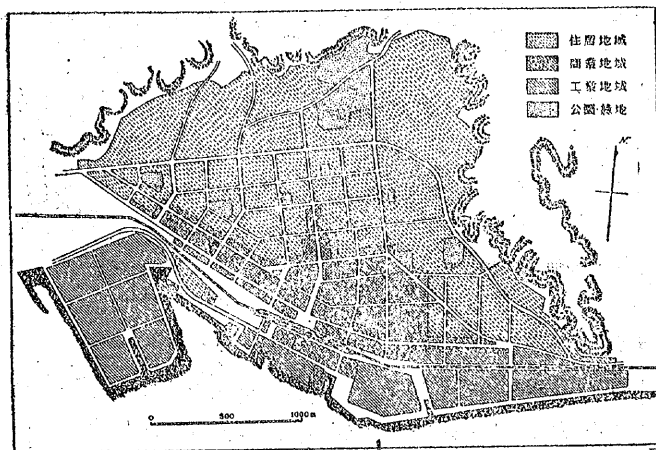
都市計画の目標 都市に人口が急速に集まり、市街がひろがるにつけて、ただ成りゆきにまかせておいたのでは、乱雑な都市ができあがってしまう。それでは人々の毎日の生活に、どんなにか不便や不利がもたらされることであろう。健全な都市生活を営むためには、どうしても都市計画が必要である。それでは新しい市街を興し、あるいは

古い市街を改良するに当たって、どんなことをおもな目標としたらよいであろうか。

それにはまず健康的な都市にすること、美しい都市に仕上げること、地震・火事・風雨などに耐えられるようにすること、生産力を増大すること、人々がなかよく働けるようにすること、新しい文化がどんどん作り出されるようにすることなどが考えられよう。これらの目標にかなうように地域や街路網を定め、宅地割を行い、公園を設けること、その他、都市計画にはたいせつな仕事がたくさんある。われわれはこれまで、都市生活の改善について、すでにいろいろ考えてきた。それらのことは、それぞれ都市計画の重要な一部であることは、都市計画の目標に照らしても明らかであろう。そこで足りないところをもう少し補って考えてみよう。

地 域 都市計画ではまず第一に官公署・商店・工場・住宅などの集まる場所をどこにするかということ（地域）を定めることがたいせつである。こはらの建物が無秩序に散在したのでは、あらゆる点で都市の生活に不利、不便をきたす。煙が多く、さわがしい音のする工場から住宅を守ったり、不健康なところに住宅地が生まれないように、また官公署・商店・工場などが、それぞれの働きを十分にできるように地域を定め、土地の用い方を指定する必要がある。

それで、たとえば海岸や鉄道に沿って工場街を作り、駅の附近や大通りは商店街とし、また映画館なども設けて、買物や娯楽の中心にしよう。大きな公園を市内の数箇所に設けて、そこにはいると、市街の中にいることを忘れるくらいに緑の深いものとし、また非常の際の避難場として備えることもたいせつである。小公園は方々に設けて、学習の参考になる樹木を植えたり、運動もできるようにしたらどうであろう。このようにして、住む場所、働く場所、休養する場所などをうまく組み合わせることによって、人々は日々を愉快に送り、仕事の能



第28図 都市計画の一例（徳山市復興都市計画）

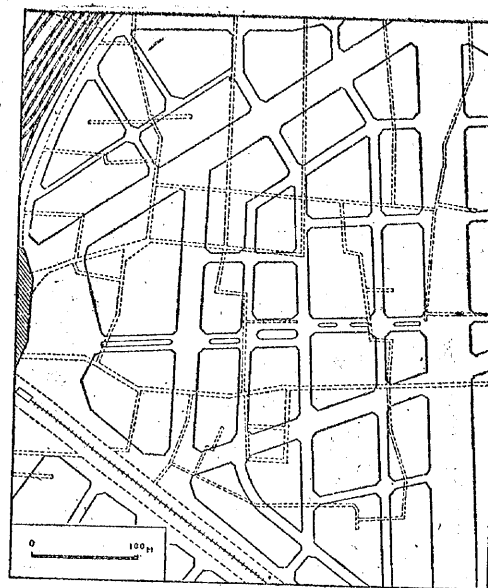
率をあげることもできるようになるに違いない。

街路 都市の生産力を高めることは、現在の日本にとって最もたいせつな仕事の一つである。そこで地域が定められたら、こんどは交通を便利にして、都市の生産力がどんどん高まるようにすることが必要である。広い舗装道路が港から工場へ、都心から郊外へと通じて、トラックやバスがどんどん走れるようにする。運河を掘って、その沿岸には倉庫や工場が建てられ、船で大量に運ばれた物資が容易に荷あげされるようにする。

道路の設計は、都市計画の中で最も目につきやすい仕事である。ごぼんの目に作られた街路網は交通に便利ばかりではなく、規則正しい敷地が得られて、土地をむだなく使用することができる。しかし、なまめの道路や放射状の街路網も、近道となって都合がよい。駅の前や、方々から道路が集まって交通が混雑する場所には、廣場を設けて、その中央には樹木や芝を植えた緑地を設ける。このような緑地は街路樹とともに、混雑する道路をせわしく通行する人々の心に、うるおい

を與える上にも大きな効果がある。

都市の道路計画は新しく始まったことではない。しかし昔の計画は、支配者の威厳を保つためになされた場合が普通であった。現代では、市民の便利をはかり、生産を盛んにし、だれでも生き生きとし



第29図 古い道路(破線)と新しい道路(実線)
(東京都内の一部)

た活動ができるように計画されなければならない。

宅地 どんなにりっぱな道路が開かれ、工場や商店が数多く建っても、働く人々が健康で、明るく暮してゆかなければなんにもならない。健康を保つ上には、日光にめぐまれた、気持ちよい家に住むことが重要な条件の一つである。

ところがこの國の都市でも、裏通りや市街の場末、あるいは工場地域の中などには、経済的にめぐまれない人々が住む不良住宅地が生まれがちである。このようなところは不健康で傳染病も発生しやすく、またいろいろな犯罪も行われやすい。そこでヨーロッパや合衆國の都市では、このようなところの生活改善に非常な努力を払い、設備のととのった労務者アパートの建設などを行っている。しかしそれでもま

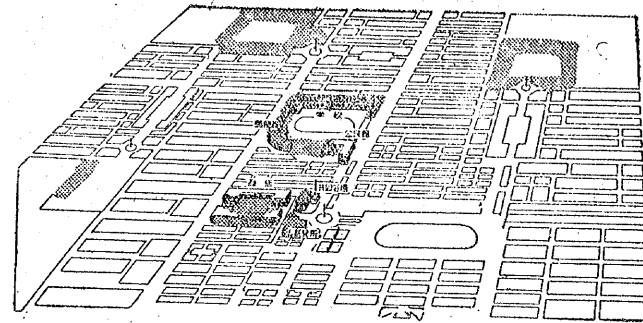
だ不良住宅地の問題がすべて解決されたわけではない。わが國の都市からも非衛生な不良住宅地を、なんとかして一日も早くなくするように努力しなければならない。

家々が密接して立てこんでいることは、非衛生なばかりでなく、火災の延焼の危険も多いから、隣の家との間は、できるだけあけておいた方がよい。また家を一定の大きさ以上に保つことも必要である。これらの目的のためには、まず第一に敷地の最小限を 100 平方メートルとし、また区画整理を行って規則正しい敷地が並ぶようにするのがよい。

東京では大正 12 年の関東大震災の後に、^{したまち}下町の区画整理を行ったが、やはり密集した家が建ってしまった。それは敷地の中に建てる家の廣さの割合が適当でなかったためである。そこでその後、都心の商業地域では家の延坪数が敷地の 80 % まで、住居地域では 60 % までというように、地域ごとに割合がきめられるようになった。しかしこれは最大限を示すものであるから、この規則を守っただけで、健康な住宅地ができると思ったらまちがいである。一番たいせつなことは、家を建てる人々が一致協力して、自分たちの都市を明かるく健康的にしようとする熱意を持つことである。

その他の計画 都市計画には、まだまだたくさんの仕事がある。水道やガスなどの設備を完全にする、防火の設備をすること、建物の高さをそろえて美しさを保つことなどがある。ことに大都市では、人口が集まりすぎて、そのために交通が混雑したり、犯罪も行われやすくなったり、配給もうまくゆかないなど、いろいろな弊害が生まれるので、都市によっては、人口の集中を制限することも必要となってくる。

また都市の人々が、たがいに理解しあって生活することは、都市生活の改善の上からもきわめてたいせつなことである。それにしても、何万という都市の人々が知りあいになることは、なんとしてもむずかしい。しかし、せめてある区域内の人々が日常親しみあって、平和な



第 30 図 近隣住区の一例

生活が営めるようにしたいものである。たとえば小学校あるいは中学校を中心として、その学区内には日常生活に必要な品物を賣る商店街や、役所の出張所、病院、小公園などの公共施設をととのえる。またその区域内には、交通量の多い大通りをつくらないで、生徒の通学や人々の日常の用足しが安全に行えるようにする。そして一つの都市がこのような近隣住区の集まりから成るようにすれば、都市生活は現在よりもずっとなごやかなものになることであろう。したがってこの近隣住区の考えは、今後の都市計画の中に取り入れられなければならないたいせつな方面である。

さらに都市が大きくなること、市内の空気もすいぶん濁ってしまう。これを防ぐために、都市のまわりに緑地帯を作って、市街地が延びてこないようにする。そしてここには、日曜日ごとに市民が散歩する森や草原があったり、ここで新鮮な野菜や牛乳が生産されたりしたら、どんなによいことであろう。

大都市が大きくなり過ぎるのを防ぐ一方では、地方の都市の施設をよくし、産業を盛んにして、今日よりも多くの人口が地方でささえられるようにすることが必要である。したがって都市計画は、その都市だけの問題ではなく、もっと廣い立場からの地方計画や、國土計画と

よく結び合わせて考えなければならない。(都市の生活改善については、私たちの科学 18、「生活はどう改めたらよいか」も参考すること。)

研 究 事 項

- (1) 郷土の都市では、現在どのような都市計画が進められているか。それによって、都市の生活にはどのような変化がもたらされる予定であろうか。
- (2) いろいろな都市に関する都市計画の図を集めて展覧すること。
- (3) 理想的な近隣住区を計画してみること。そしてそれを絵や地図に描いたり、模型に作ること。
- (4) 地方計画や国土計画とはどんなもので、どんな目的で行われるか。書物で調べたり、適当な人の説明を聞くこと。

6. われわれの都市に

だれでも自分の住んでいる都市を、できるだけ住みよいところになりたいと思うに違いない。それには各個人も各家庭でも、防火や衛生に注意したり、家の附近の清掃を行ったり、外へ出では交通道德を守るなど、いろいろなことに氣をつけることがまず必要である。また近隣の人々ともなかよくして、日常生活にも何かと助けあったり、さらにいなかの人々ともよく理解しあって生活することもたいせつである。しかし、このように各個人や各家庭で、身近なことに氣をつけるだけでは、まだ不十分である。

たとえば都市計画のような大きな仕事は、どうしても都市の政治の一部として取り上げられて実行されることが必要である。また都市の経済・衛生・教育・犯罪や事故の防止その他に関するいろいろな制度や施設などについても、同様な方面がたくさんにある。だから都市の政治のありかたによっては、市民が幸福にもなるし、その反対に不幸にもなる。

民主的な都市 ところでもしも少数の権力者が、政治上のいろいろなことを自分できめ、市民に命令してこれを実行させようとしたら

どうであろうか。それでは市民の幸福はほとんど望むことができないであろう。

これに反して全市民が、自分たちの住んでいる都市は自分たちのものであることを考えて、おたがいに力を合わせて自分たちで治めてゆくようにしたらどうであろうか。これによって、はじめて市民の幸福が得られるに違いない。これがためには市民のすべてが自分の都市の政治に参加し、みんなの意見によっていろいろなことを定め、その結果が実行されるようにしなければならない。

しかし何万という市民が、いつも集まって相談をしたり、仕事をきめたりすることは困難だから、適当な人を選び、それらの人々が市民を代表して、市民のために仕事をしてゆくのが一番よいわけである。これは國の政治の場合も、都道府縣の場合も同様であるが、都市(市町)や村は、われわれに最も身近な共同生活集團である。だからこれを自分たちでよく治めてゆくことは、新しい日本を建設する政治のもとである。

都市の政治と市民 われわれの住んでいる都市は、われわれのものである。このことを全市民はいつもしっかり心にとどめておくことが最もたいせつである。それで、たとえば市町長や市町会議員の選挙に際しては、選挙権・被選挙権の有無にかかわらず、市民全体が熱意をもってこれに臨み、市民の意志が十分に表われるように努力しなければならない。また市町長、市町会議員、選挙の仕事をする選挙管理委員、市町の仕事のしかたなどを見張る役目を持つ監査委員、都市警察を管理する公安委員、教育のことを管理する教育委員、その他のいろいろな委員会の人々や公務員が、正しくその職務を果たすことができるように助力することが必要である。それについても各市民は、選挙に当たって、自分の住んでいる市町を暮らしよいところにするために、誠意をもって人々を指導すると考えられる候補者に投票すること

が何よりもたいせつである。そして当選者が、全市民の幸福を増進することに対して、責任をもって努力するようにさせなければならない。しかし、もしも当選者が民意をよくくんで政治を行わない場合には、市民は定められた方法によってその役目をやめさせるか（地方自治法を参照すること）、あるいは次回の選挙に際して、りっぱな候補者に投票するように心がけなければならない。

都市の生活で、もし、市民が自分たちの幸福をたがいに協力して進めてゆく方法を十分に知らない場合には、うっかりすると一部の顔役というような者が勢力を持ち、人々を巧みに動かして勝手なことをするようなことが起る。多くの市民にとっては不便な場所に、一部の人の利益のために、公共の施設を作ったりするようなことはないであろうか。そういう人たちが市会や、あるいはいろいろな委員会に勢力を持つようなことになれば、都市の行政は、決してうまくはゆかない。そうならないためには、市民のひとりひとりが、ほんとうに自覚して、自分たちの共通の幸福のために協力するのが最も重要なことである。

研 究 事 項

- (1) 市町村長・市町村会議員を選ぶ資格(選挙権)、市町村長・市町村会議員の被選挙権、および市町村長や市町村会議員の仕事について調べること。
- (2) 郷土の市町村長・市町村会議員の名まえ・年齢、その属する政党を書いた表を作ること。
- (3) 市町村長・市町村会議員の選挙に際して、人々が燃意を持ち、選挙が正しく行われるようにするためには、現在の生徒としてどんな助力ができるかを学級で討議すること。
- (4) 郷土の市町村には、どんな委員会があって、どんな仕事をしているかを調べること。
- (5) 郷土の市町村議会を傍聴すること。
- (6) 郷土の都市を今後いっそう発展させ、また住みよくするためには、いろいろな方面にどういう方法があるかについて学級で討議すること。

附 録

わが国および外国のおもな都市表

附 録 日本^の都市表 (市制を施行しているもの 昭和24年4月1日現在)

都 市 名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口	都 市 名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口
札幌市	大正11(1922) 8. 1	259,602	前橋市	明治25(1892) 4. 1	90,432
函館市	"	211,441	高崎市	明治33(1900) 4. 1	88,483
小樽市	"	164,934	桐生市	大正10(1921) 3. 1	91,482
旭川市	"	107,508	伊勢崎市	昭和15(1940) 9.13	46,046
室蘭市	"	96,722	川崎市	大正11(1922)12. 1	50,294
釧路市	"	61,421	越前市	昭和8(1933) 4. 1	116,007
帯広市	昭和8(1933) 4. 1	46,774	熊谷市	"	63,267
北見市	昭和17(1942) 6.10	40,989	浦和市	昭和9(1934) 2.11	106,176
夕張市	昭和18(1943) 4. 1	82,060	大宮市	昭和15(1940)11. 3	91,378
網走市	"	42,978	千葉市	大正10(1921) 1. 1	122,006
留萌市	昭和22(1947) 2.11	34,850	銚子市	昭和8(1933) 2.11	69,543
苫小牧市	昭和22(1947)10. 1	30,057	市川市	昭和9(1934)11. 3	92,719
	昭和23(1948) 4. 1	36,760	船橋市	昭和12(1937) 4. 1	78,996
弘前市	明治22(1889) 4. 1	63,634	館山市	昭和14(1939)11. 3	36,599
青森市	明治31(1896) 4. 1	90,831	木更津市	昭和17(1942)11. 3	37,675
八戸市	昭和4(1929) 5. 1	91,328	松戸市	昭和18(1943) 4. 1	54,514
盛岡市	明治22(1889) 4. 1	107,096	東武市	明治22(1889) 5. 1	417,505
釜石市	昭和12(1937) 5. 5	28,874	八王子市	大正6(1917) 9. 1	72,944
宮内市	昭和16(1941) 2.11	36,761	立川市	昭和15(1940)12. 1	45,302
一宮市	昭和23(1948) 4. 1	34,650	武蔵野市	昭和22(1947)11. 3	63,486
宮城県	明治22(1889) 4. 1	293,208	横須賀市	明治22(1889) 4. 1	814,268
仙台市	昭和8(1933) 4. 1	46,706	須賀川市	明治40(1907) 2.15	261,759
石巻市	昭和16(1941)11.23	42,492	川崎市	大正13(1924) 7. 1	252,923
秋田県	明治22(1889) 4. 1	116,306	平塚市	昭和7(1932) 4. 1	45,505
秋田市	昭和15(1940)10. 1	46,416	鎌倉市	昭和14(1939)11. 3	54,949
山形県	明治22(1889) 4. 1	99,043	藤沢市	昭和5(1940)10. 1	78,759
山形市	"	55,319	小田原市	昭和15(1940)12.20	68,911
米沢市	大正13(1924)10. 1	42,794	茅ヶ崎市	昭和22(1947)10. 1	43,315
酒田市	昭和8(1933) 4. 1	49,537	新潟県	明治22(1889) 4. 1	204,495
福島県	明治32(1899) 4. 1	59,024	新潟市	明治39(1906) 4. 1	54,958
福島市	明治40(1927) 4. 1	86,763	高崎市	明治44(1911) 9. 1	38,226
郡山市	大正13(1924) 9. 1	64,539	三条市	昭和9(1934) 1. 1	45,242
平沼市	昭和12(1937) 6. 1	31,631	松本市	昭和15(1940) 7. 1	36,649
茨城県	明治22(1889) 4. 1	61,416	新発田市	昭和22(1947) 1. 1	35,342
水戸市	昭和14(1939) 9. 1	50,159	富山県	明治22(1889) 4. 1	137,818
土浦市	昭和15(1940)11. 3	53,298	富山市	"	133,858
栃木県	明治29(1896) 4. 1	97,075	金沢市	明治22(1889) 4. 1	231,450
宇都宮市	大正10(1921) 1. 1	51,309	七尾市	昭和14(1939) 7.20	39,466
宇都宮市	昭和12(1937) 4. 1	42,553	小松市	昭和15(1940)12. 1	61,899
宇都宮市	昭和18(1943) 4. 1	55,305			

都 市 名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口	都 市 名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口
福井県	明治22(1889) 4. 1	77,480	鈴鹿市	昭和17(1942)12. 1	67,659
敦賀市	昭和12(1937) 4. 1	28,268	大津市	明治31(1896)10. 1	81,375
武生市	昭和23(1948) 4. 1	31,388	根津市	昭和12(1937) 2.11	46,187
山梨県	明治22(1889) 7. 1	104,982	浜松市	昭和18(1943) 4. 1	45,995
甲府市	明治22(1889) 7. 1	104,982	京都府	明治22(1889) 4. 1	999,396
長野県	明治30(1897) 4. 1	94,937	福知山市	昭和12(1937) 4. 1	38,325
長野市	明治40(1907) 5. 1	83,795	大津市	昭和13(1938) 8. 1	92,139
上野原市	大正8(1919) 5. 1	41,773	大阪府	明治22(1889) 4. 1	1,559,316
岡谷市	昭和11(1936) 4. 1	36,491	堺市	"	194,049
飯田市	昭和12(1937) 4. 1	30,295	岸和田市	大正11(1922)11. 1	88,654
岐阜県	昭和16(1941) 8.10	35,623	大津市	昭和11(1936)10.15	76,314
岐阜市	明治22(1889) 7. 1	166,859	布田市	昭和12(1937) 4. 1	133,934
大垣市	大正7(1918) 4. 1	63,830	田原市	昭和14(1939) 4.29	42,733
高山市	昭和11(1936)11. 1	41,877	豊田県	昭和15(1940) 4. 1	72,197
多治見市	昭和15(1940) 8. 1	36,104	豊田市	昭和17(1942) 4. 1	30,652
静岡県	明治22(1889) 4. 1	205,330	高松市	昭和8(1943) 1. 1	37,714
浜松市	明治44(1911) 7. 1	125,767	豊田県	昭和18(1943) 5. 1	47,129
沼津市	大正12(1923) 7. 1	92,838	守口市	昭和21(1946)11. 1	52,042
清水市	大正13(1924) 2.11	80,474	枚方市	昭和22(1947) 8. 1	41,041
熱海市	昭和12(1937) 4.10	34,754	茨木市	昭和23(1948) 1. 1	33,635
三島市	昭和16(1941) 4.29	46,174	泉佐野市	昭和23(1948) 4. 1	33,536
富士宮市	昭和17(1942) 6. 1	40,904	神戸市	明治22(1889) 4. 1	607,202
伊東市	昭和22(1947) 8.10	34,472	姫路市	"	197,452
鳥取県	昭和23(1948) 1. 1	30,635	尼崎市	大正5(1916) 4. 1	232,755
鳥取市	昭和23(1948) 4. 1	34,185	明石市	大正8(1919)11. 1	57,390
倉吉市	"	31,152	西宮市	大正14(1925) 4. 1	108,707
愛知県	明治22(1889)10. 1	853,005	洲本市	昭和15(1940) 2.11	36,505
名古屋	明治39(1906) 8. 1	129,355	伊丹市	昭和15(1940)11.10	53,283
豊橋市	大正5(1916) 7. 1	85,363	芦屋市	"	37,033
岡崎市	大正10(1921) 9. 1	62,460	相生市	昭和17(1942)10. 1	26,196
瀬戸市	昭和4(1929)10. 1	42,788	奈良県	明治31(1896) 2. 1	82,401
半田市	昭和12(1937)10. 1	59,819	大和高田市	昭和23(1948) 1. 1	31,334
豊川市	昭和18(1943) 6. 1	55,036	和歌山県	明治22(1889) 4. 1	171,800
春日井市	"	47,104	新宮市	昭和8(1933)10. 1	31,437
津市	昭和22(1947) 3. 1	31,737	海南市	昭和9(1934) 5. 1	33,756
南砺市	昭和23(1948) 4. 1	41,103	田辺市	昭和17(1942) 5.20	36,472
津市	明治22(1889) 4. 1	63,695	鳥取県	明治22(1889)10. 1	57,218
四日市市	明治30(1897) 8. 1	112,433	松江市	昭和2(1927) 4. 1	55,837
宇治山田市	明治39(1906) 9. 1	65,974	松江市	明治22(1889) 4. 1	62,116
松坂市	昭和8(1933) 2. 1	41,182	浜田市	昭和15(1940)11. 3	39,585
桑名市	昭和12(1937) 4. 1	35,742	山形県	昭和16(1941)11. 3	43,855
上野市	昭和16(1941) 9.10	39,371			

都市名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口	都市名	市制施行年月日	昭和22年 (1947) 10月1日 人口
岡山県	岡山 明治22(1889) 6. 1	140,631	福岡県	福岡 明治22(1889) 4. 1	328,586
岡山県	倉敷 昭和 3(1928) 4. 1	48,133	福岡県	久留米 明治32(1899) 4. 1	109,321
岡山県	津山 昭和 4(1929) 2.11	51,642	福岡県	門司 明治33(1900) 4. 1	167,996
岡山県	玉野 昭和15(1940) 8. 3	41,098	岡山県	小倉 大正 3(1914) 4. 1	78,694
岡山県	児島 昭和23(1948) 4. 1	32,185	岡山県	若松 大正 6(1917) 3. 1	167,829
広島県	広島 明治22(1889) 4. 1	224,205	岡山県	大正 大正13(1924) 9. 1	68,083
広島県	尾道 明治31(1898) 4. 1	59,890	岡山県	戸畑 昭和 6(1931) 1. 1	47,327
広島県	呉 明治35(1902)10. 1	185,740	岡山県	直方 昭和 7(1932) 1.20	47,488
広島県	福山 大正 5(1916) 7. 1	59,575	岡山県	飯塚 昭和18(1943)11. 3	75,926
広島県	三原 昭和11(1936)11.15	48,513	佐賀県	佐賀 明治22(1889) 4. 1	64,962
山口県	下関 明治22(1889) 4. 1	176,666	佐賀県	唐津 昭和 7(1932) 1. 1	49,732
山口県	宇部 大正10(1921)11. 1	109,167	長崎県	長崎 明治22(1889) 4. 1	198,405
山口県	萩 昭和 4(1929) 4.10	97,947	長崎県	佐世保 明治35(1902) 4. 1	175,233
山口県	徳山 昭和 7(1932) 7. 1	41,579	長崎県	島原 昭和15(1940) 4. 1	40,742
山口県	防府 昭和10(1935)10.15	78,796	長崎県	諫早 昭和15(1940) 9. 1	64,193
山口県	下松 昭和11(1936) 8.25	67,172	長崎県	大村 昭和17(1942) 2.11	56,848
山口県	岩国 昭和14(1939)11. 3	38,544	熊本県	熊本 明治22(1889) 4. 1	247,607
山口県	小野田 昭和15(1940) 4. 1	57,661	熊本県	八代 昭和15(1940) 9. 1	48,292
山口県	光 昭和15(1940)11. 3	43,956	熊本県	荒尾 昭和17(1942) 2.11	51,448
山口県	徳島 昭和18(1943) 4. 1	36,052	熊本県	人吉 昭和 2(1927) 3.11	43,824
徳島県	徳島 明治22(1889)10. 1	103,252	大分県	大分 明治44(1911) 4. 1	86,570
徳島県	鳴門 昭和22(1947) 3.11	43,020	大分県	別府 大正13(1924) 4. 1	96,685
香川県	高松 明治23(1890) 2.15	101,424	大分県	中津 昭和 4(1929) 4.20	51,976
香川県	丸亀 明治22(1889) 4. 1	36,334	大分県	田原 昭和15(1940)12.11	46,234
香川県	坂出 昭和17(1942) 7. 1	40,309	大分県	佐伯 昭和16(1941) 4.29	38,666
愛媛県	松山 明治22(1889)12.15	147,967	宮崎県	宮崎 大正13(1924) 4. 1	92,094
愛媛県	今治 大正 9(1920) 2.11	52,026	宮崎県	延岡 昭和 8(1933) 2.11	73,745
愛媛県	宇和島 大正10(1921) 8. 1	52,108	鹿児島県	鹿児島 明治22(1889) 4. 1	170,416
愛媛県	八幡浜 昭和10(1935) 2.11	37,809	鹿児島県	川内 昭和15(1940) 2.11	40,705
愛媛県	新居浜 昭和12(1937)11. 3	51,936	鹿児島県	鹿屋 昭和16(1941) 5.27	62,503
愛媛県	西條 昭和16(1941) 4.29	44,840			
高知県	高知 明治22(1889) 4. 1	147,120			

追加

道県名	都市名	市制施行年月日	人口	道県名	都市名	市制施行年月日	人口
北海道	札幌	昭和24(1949) 4.1	29,275	山形県	新庄	昭和24(1949) 4.1	30,239
福島県	白河	昭和24(1949) 4.1	31,306	栃木県	鹿沼	昭和23(1948)10.1	17,463
群馬県	太田	昭和23(1948) 5.3	25,900	熊本県	水俣	昭和24(1949) 4.1	39,818

外国のおもな都市表 (人口50万以上のもの)

都 市	所 在 地	人 口	都 市	所 在 地	人 口
シャンハイ(上海)	中 国	334.6	ドムストム	ドイツ	53.7
ペイピン(北平)	中 国	155.6	オランダ	オランダ	79.4
テンチン(天津)	中 国	129.2	ベルギー	ベルギー	61.2
ホンコン(香港)	中 国	107.2	スイス	スイス	89.8
ナンキン(南京)	中 国	101.9	イタリア	イタリア	67.5
シェンヤン(瀋陽)	中 国	86.4	フランス	フランス	148.0
カントン(廣州)	中 国	86.1	イギリス	イギリス	121.9
ハンコウ(漢口)	中 国	77.8	アメリカ	アメリカ	92.5
チュンチン(重慶)	中 国	63.5	ソ連	ソ連	69.8
ハンチョウ(杭州)	中 国	63.1	インド	インド	66.0
チャンシー(長沙)	中 国	60.7	バングラデシュ	バングラデシュ	105.1
ハルビン(哈爾濱)	中 国	52.0	パキスタン	パキスタン	493.4
チンタオ(青島)	中 国	51.5	バングラデシュ	バングラデシュ	91.4
ソウル(京城)	朝鮮	93.5	バングラデシュ	バングラデシュ	57.1
バンコク(バンコク)	タイ	93.1	バングラデシュ	バングラデシュ	230.1
シンガポール	マレーシア	76.9	バングラデシュ	バングラデシュ	172.6
マニラ	フィリピン	62.3	バングラデシュ	バングラデシュ	70.9
カルカッタ	インド	210.9	バングラデシュ	バングラデシュ	870.0
ボムベイ	インド	149.0	バングラデシュ	バングラデシュ	113.2
ハイドラバード	インド	77.7	バングラデシュ	バングラデシュ	110.2
ラーホール	インド	73.9	バングラデシュ	バングラデシュ	68.0
アーメーダバード	インド	67.2	バングラデシュ	バングラデシュ	62.4
デリー	インド	59.1	バングラデシュ	バングラデシュ	53.2
テヘラン	イラン	52.2	バングラデシュ	バングラデシュ	131.2
イスタンブール	トルコ	54.0	バングラデシュ	バングラデシュ	68.6
アムステルダム	オランダ	84.4	バングラデシュ	バングラデシュ	90.3
ブリュッセル	ベルギー	65.2	バングラデシュ	バングラデシュ	114.0
パリ	フランス	93.4	バングラデシュ	バングラデシュ	66.7
モスクワ	ソ連	116.3	バングラデシュ	バングラデシュ	745.5
ロンドン	イギリス	413.7	バングラデシュ	バングラデシュ	339.7
シカゴ	アメリカ	319.1	バングラデシュ	バングラデシュ	193.1
ニューヨーク	アメリカ	84.6	バングラデシュ	バングラデシュ	162.3
東京	日本	83.3	バングラデシュ	バングラデシュ	150.4
バタビヤ	インドネシア	80.9	バングラデシュ	バングラデシュ	87.8
ジャカルタ	インドネシア	64.4	バングラデシュ	バングラデシュ	85.9
バンダルネラ	インドネシア	60.4	バングラデシュ	バングラデシュ	81.6
シンガポール	マレーシア	58.5	バングラデシュ	バングラデシュ	77.1
コロンボ	スリランカ	51.9	バングラデシュ	バングラデシュ	67.2
マニラ	フィリピン	51.0	バングラデシュ	バングラデシュ	66.3
バタビヤ	インドネシア	50.1	バングラデシュ	バングラデシュ	63.5
ジャカルタ	インドネシア	67.2	バングラデシュ	バングラデシュ	58.7
シンガポール	マレーシア	95.1	バングラデシュ	バングラデシュ	57.6
バンダルネラ	インドネシア	193.0	バングラデシュ	バングラデシュ	56.9
ジャカルタ	インドネシア	84.3	バングラデシュ	バングラデシュ	175.4
バンダルネラ	インドネシア	46.3	バングラデシュ	バングラデシュ	178.2
シンガポール	マレーシア	168.2	バングラデシュ	バングラデシュ	138.0
ジャカルタ	インドネシア	82.8	バングラデシュ	バングラデシュ	51.0
バンダルネラ	インドネシア	70.2	バングラデシュ	バングラデシュ	77.0
シンガポール	マレーシア	66.0	バングラデシュ	バングラデシュ	245.7
ジャカルタ	インドネシア	62.5	バングラデシュ	バングラデシュ	52.2
バンダルネラ	インドネシア	61.5	バングラデシュ	バングラデシュ	101.6
ジャカルタ	インドネシア	54.7	バングラデシュ	バングラデシュ	52.3
バンダルネラ	インドネシア	54.0	バングラデシュ	バングラデシュ	139.8
ジャカルタ	インドネシア		バングラデシュ	バングラデシュ	167.7

(都市の人口は The World Almanac and Book of Facts for 1947 による)

K2523-1-52

K2523-2-5

社 会 科 5
日 本 の 都 市
Approved by Ministry of Education
(Date May, 6, 1949)

著作権所有

文 部 省

昭和二十三年十一月二十日 翻刻発行
昭和二十四年五月二十日 修正翻刻印刷
昭和二十四年六月十日 修正翻刻発行
〔昭和二十四年六月十日 文部省検査済〕

定価金拾参円四拾銭

東京都文京区久堅町一〇八番地
翻刻発行所 日本書籍株式会社

代表者 木村淵之助

金沢市中村町七丁目三四番地
印刷所 吉田次作商店中村町工場

代表者 吉田次作

東京都文京区久堅町一〇八番地
発行所 日本書籍株式会社

